

報



會

會 岳 山 本 日

93

月 四・三 年 五 十 和 昭

熊の爪跡續

廣 瀬 潔

『極』の樹で、武田久吉氏からえらくと、ちめられて、尾瀬の熊に笑はれたが、その後深田久彌氏に會ふと「廣瀬さん、柄と水筒では葉の大きさが、まるで違ひますよ」

と、これも仲々鼻息が荒い。小説家も近頃は植物のことまで勉強してゐるのかと、感心したが、後でアザラシ會の瀨名貞利氏に聞いたところ、

「深田の植物學は、彼の山友達、植物學專攻の田邊知雄氏の受け賣りらしい。」

とのことだ。

が深田氏は更に語をついで「この間富士山頂で熊が格闘したつて、新聞に出てゐたのをご覧になりましたか。あれは本當でせうか」

ところが、私は、最近尾瀬の熊の方に氣を取られてゐて、富士山頂でそんなことが起つてゐるとは、夢にも知らなかつた。

「え？ 何新聞に……」

「東京朝日の青鉛筆欄に、二、三日前でした」

深田氏の話によると

「今年は表日本が晴天つゞきだつたので、富士山も至つて雪が少なかつた」

と云ふ。それは解つてゐる。一月下旬まで、泥の寶永山が出てゐて、私は毎日鎌倉から東京へ出勤の途中電

車の窓から、ガラス越しに心配してゐたのだ。

「ところが、雪が少いので、御殿場の熊と吉田の熊が頂上に登つて来て劍ヶ峰絶頂で出會ひ、山頂氣象觀測所の屋根で、激しい格闘をしたらしく。音が止んでから、觀測技手と剛力の梶正吉君が恐る／＼出て見ると、屋根の氷雪に熊の爪跡が残つてゐて、あたりに紅い血痕があつたと云ふのです」

「へえ。するとつまり熊が集中登山をやつて、劍ヶ峰一番乗りの先陣争ひでもやつたと云ふところですかねえ」

「本當でせうか」

「ちよつと信じられませんか。鷹が兎でも捕つて来て、屋根で食べたのではないでせうか」

「さうでせうねえ。いくら熊が生れながら、親ゆづりの五本爪アイゼンを持つてゐるとは云へ、氷雪を踏んで頂上まで登つて來るとは思はれません」

「それに富士山には「梶正吉」なんて剛力は居ませんよ。梶房吉や弟の正作と云ふのは居ますけれど、二人を一緒にしたやうな正吉なんて男は……。眉つばですわね」

「どうも人の名前では毎々苦勞します」

尾瀬の熊や、富士の熊の爪跡で、頭を悩ましてゐる折柄、今度は北海道の熊が登場して來た。北海道のは爪

跡どころか、本物に出合つた山岳會員岡本三男氏が、大膽にも、寫眞に撮つたのだと、私に送つて來た。斷つておくが、岡本氏は、私と全々未知の間柄で、熊の寫眞に添えた手紙には

「冠省。會報「熊の爪跡」面白く拜見致しました。文中「山岳會の誰だつたかど、いつか北海道で野生の熊の寫眞を撮つた云々……」と云ふのは多分小生のことかと思ひますが、あれは熊を撮つたのではなく、熊が寫つて居たと云ふ程度のもので、見せて貰つたには恐れ入りました」といふ書出しで、「昨秋(九月)黒岳にて撮影の熊御目にかけます」とある。

先づ全景寫眞が最初にあつて、大峽谷の河原に、よく見ると、砂粒位の熊がある。その熊を約二十メートル位隔つた上流から撮影するため、×印の地點まで接近して、第二の寫眞を撮つたのだと、説明してある。「これ以上近接不可能、恐しいからではなく、熊が逃げてしまふから……」

と、ちやんと斷り書がついてゐる。熊も逃げだすやうな岡本氏とは、一體どんな恐しい人だらう「日本山岳會にはえらい人がゐるものだ」などと、未知の同氏の風貌を想ひ浮べながら、第二の寫眞を見ると、

「居る／＼。熊が三匹！ 母子の熊かしら。連れ立つて何か喰べながら溪へ下りて行く。二枚撮つてあるの

で、熊の動きがよく解る」

更にそれを大きく引伸した寫眞が数枚ある。手紙によれば、五十ミリレンズで、ライカ判に寫したのを、四ツ切に伸したとのことだ。熊の脊に當つた陽光が滑かな毛並に反射してゐる。口元からあご、前肢など實によく撮れてゐる。耳がちょこんと立つてゐる。確に熊だ。

目 次

- ・ 熊の爪跡 廣瀬 潔……一
- ・ 山想堂雜記 島田 武時……二
- ・ 木曾駒連峯と私達 跡部 昌三……三
- ・ 北條の多門治氏近況 小野 幸……五
- ・ ペデカリ隊の遭難 北大山岳部……六
- ・ 白馬樺池の遭難 石原 巖……七
- ・ 冬のゼム氷河附近四 望月 達夫……八
- 新著紹介 〇 切抜帳 〇 會員通信 廣瀬・伊藤・濱野 飛川・石田・富田……三三
- 會務報告……三三

北海道の熊の寫眞を見てゐると、同じ勸先のビルにゐる織内信彦氏がやつて來て、

「また熊が現れた」

と、報告がある。

「何處へ」

「今度はアメリカの熊だ」

「いよ／＼話は世界的になつて來

「た」
「昨夜小島烏水さんのお宅へ上つたら、君の『熊の爪跡』が話題に上つて、それからシエラネバダの熊の話が出たのだが、これはまた相當なものだ」

「と云ふと……」

「自動車で山道を行くと、この山道に出て来て、自動車の前に寝そべつて動かないさうだ」

「恐しいね」

「いや、何か食べものをくれつて……」

「くれなければ、動かないと云ふところだね」

「さうだ。これにはさすがの小島烏水氏も、相當立退料をせしめられたらしい」

「しかし、相手が熊とあつては憎めないね」

「それで立派に野生なんださうだ」

「その位だつたら、寫眞の撮影なんかわけない」

「いや、モデル料を取られるかも知れない」

「まさか」

アフリカでは、ライオンが自動車道路に出て来るところがあるさうだ。田邊主計氏の話によると、そこには「ライオンが出たら射殺しないで、静に警笛を鳴らして下さい」との掲示板が出てゐるさうだ。ライオンもだん／＼数が少くなつたので、もしかか並に保護されるやうになつた

のかも知れない。だが、さすがに「ライオンが立退料を請求した」と云ふ話は未だ聞かない。

山想堂雜記

島田 武 時

何時何分にどこについたとか、なにをしたとかと詰らぬ紀行文、つまり山岳文學の貧困を歎かふる（山岳會々報）浦松佐美太郎氏のその隨筆は（登山三昧、山靴、共に文藝春秋）登山は窮極に於ては征服であり、山に抱かれるなどと云ふ考へはそんな登山をしたことがない人であるといふ見事な嘆詞と、ヴァン、ゴッホの靴の繪から始まる氣取つた書き方から始まるのであるが、その内容に至つては、何時何分にどうしたと云ふかはりに雷がなつたとか、確保しようがなくて岩にひついたりとか、靴が凍つたとか、クレバスにおちたがうまくスキーがひつかゝつて助かつたとか、暗い小舎にランプがついてあかるかつたとか、結局目出度くおさまる大衆文藝的スリルしか書いてない。

田中耕太郎氏の中南米風土記（文藝春秋）をよむと飛行機でアンデスを越へてアコンガアを眺めヒマラヤ山について世界第二の高峰と述べて居る。豊島與志雄氏は朝日新聞の文藝欄でベヒトルドの「ヒマラヤに挑戦して」をよんで山に行く人の氣持

が解つたと書いて居る。ヒマラヤ山と云ふ世界第一の山があるのか、ベヒトルドにそんな著書があるのか、私は知らない。およそ人間は専門外のことを書くことなどないといふことを書くものか。

筆者註、ベヒトルドのナングパルバットを小池新二氏が譯してゐるが、この譯書名は以前の伊藤氏のパウアーのキャンチの譯書と同じです。

現在の若い人達は皆な日本の山に先登諸氏の抱いた様に處女峰に寄する熱情がさゞげられない、それにしてもヒマラヤへも容易にゆけないと云ふ至極同情さるべき不平不満をもつて居るらしいが、それだから山に行かないと云ふ様な結果にならないでほしい。

實際日本の山についてはその記録、記事だけでも一つの山について多くは数十度、少なくて数度は書かれて居るだらう。だがしかしそれをよんでその山に對する熱情をなくしては困る。それは單に他人の経験でしかない。ここに愚劣な例を引けば且つていくらの人が林檎を味はつたか知れない。しかし自分が味つてみなければその味の眞味が分らないだらう。ひつきやう山も他人の登山だけでは百聞は一見にしかずであらう。他日ヒマラヤに容易にゆかれる時が来るにしても矢張り多くの日本の山に於ける経験と鍛錬が根本的な必要事となるであらう。だから吾々は現在在は黙々とした経験と鍛錬の蓄積のみが最大目標ではないかと考へる。

私は前項に多くの経験の蓄積と書いたがこれを少し説明したい。之は私の獨斷的な見方かも知れないが現在是非常に登山の技術的方面が重要視されて居る様に思はれる。所謂の登山方法の研究も勿論必要ではあるが、一つの例として極地法をとつてみてそれを山と云へばほとんど限られた山岳と思はれる。それ故にその方法の研究のみに重きをおけばいさゝか登山對象の山の範圍は限られ、登山生活に於ける廣範圍の山岳の経験は甚だ少くしか得られなくなるを免がれない。極端に云へば極地法は完成したが日本の山は殆んど知らないといふ崎形的な登山家が多くなるであらう。多くの異つた見解はあらうが、私は吾々はヒマラヤ登山家である以前に立派な日本の山岳家として完成されなければならぬと信ずる。そしてそのため落つていてその完成を心掛けられるのは今だと思ふ。

昨年中私は新刊の二三の山の隨筆集と今迄によみのこして居た數冊の山の本をよんだ。過去に於ける山岳書を全部よむことは仲々の難事業であり、最近の様に出版が少なくなるのとやつと追いつくのである。深田久彌氏の「わが山々」は仲々良いと思ふものがあつた。私はこの人の小説は大きらいなんだが文には流石文筆業者としての苦心の跡があつた。時に依つては所謂文士の紀行文と云ふ様なものになるのを故意に避け縁としたところがあるやうにも思はれる。竹中要氏、田中薫氏の半島の山と風景、臺灣の山と蕃人、共に詰らぬ獨善的なものだ。前者は特にその幼稚さが眼につく。昨年中に出版された二三の隨筆集も特に詰らぬものであつた。一體山岳家は隨筆集を書いて出版しようとするならば登山家として精進するより文學道に精進しなければならぬといふところが多いのを承知してゐるのだらうか。殊に小説一つよまない連中が山へ行くだけで隨筆を書いて山の隨筆で候とは山さへ描いておればそれは山岳畫家だとも考へるのと同じだ。實に小學生の作文にも劣るのが多くてうんざりした。

登山と云ふことはあるひは狭い範圍にこもるものかも知れないが文章の發表と云ふものは登山界以外にも眼にふれるものだ。讀ませるかぎりには登山家と云ふなにか特別なものゝ様な獨善的な、甘へた錯覺は最早や清算さるべきであらう。

山岳文學と云ふものはもつと優れたものが多く發表され社會に廣くよまれるならば吾々の企劃する遠征にもつと多くの社會的支持、聲援があるはずだ。現在の山岳文學は一體どれだけの社會一般人に（もつと狹範圍の讀書人に限つてもよい）よまれて居るか、又は讀まれ得る優秀性をもつてゐるか誰れか考へたことがあるのだらうか。明治以來幾百の出版

があつたか知らないが登山家以外に推賞された山岳文學は一體いくつあつたか。現在の様な發展のない幼稚さではその甘さに嘲笑を送られるに過ぎないだらう。

(一五、二、五)

木曾駒連峰と私達

—昭和十四年度の報告—

跡部 昌三

昨年の會報八十四號に「木曾駒と私達」と題して、私達名古屋山岳會の仲間によつて進められて來た會創立以來四年間の、木曾駒連峰への足跡に就て若干の報告をこゝろみた。ここに再び、昨年度昭和十四年の木曾駒連峰の上にひかれて來た私達の營みを、甚だ潜越ながら以下簡単に記述さして戴く事にする。

「達」は敢て木曾駒連峰に自己のものゝ全能力を傾注して來たものではない。矢張りより高き岩と氷への領域に、多分な憧れをもち、其處に自身を見出す事を欲し、只管それを希望してゐる。

しかし、木曾駒連峰は名古屋よりして手頃な高連山であることゝ、其處に胚胎してゐる幾多の好ましさを知ると共に、此の連峰が可成り不遇な環境に置かれてあつた事により、いまだに登山者の息のつかぬ尾根や谷の存在を知るに及んで、一層興味を覚え、僅かの餘暇を得ては

心のおもむくまゝに木曾駒連峰に分け入り、其處、彼處と歩んで來たものに過ぎない。

登山者は未知なる境地へひたむきなそれへの憧れを有つ。私達もひたむきなそれへの憧れと、山への心を抱いて十四年度もそのいくつかを私達の手によつて報告出来る事に對して、ひそかなる喜びを感ずる。しかし、人の觸手から遠ざかつてゐた尾根や谷がそうであるものではなく、従つてそれらが次第に、所謂粒のこまかくなつてゆくのは否めない傾向と言はねばならぬ。

十四年度に於ける木曾駒連峰への私達の山行は、回数にして十八、日数は四十五、そして四十人の私達會員が動いてゐる。延日数にして九十七日といふ数字が出てゐる。此の動きを月別にしてみると左記の如きものになる。

類別 月別	山行 回数	山 行 人 員			山行 日 数
		會 員	會 員 外	ポ ー ター	
3	2	3	3	1	16
4	2	3	1	1	3
5	2	4	1	1	3
6	1	7	1	1	4
7	2	13	1	1	3
8	2	2	1	1	5
9	1	3	1	1	3
10	1	3	1	1	3
11	1	3	1	1	3
計	18	40	9	2	43

ポーターはいづれも荷揚げに依頼し

共に一日のみ使用したものである。尙八月の二山行のうち一山行は、木曾駒集中登攀並に分散下降を指すものであつて、之の班別を山行数として見る事も出来るが、此處では之を一山行として数へる事にした。

昭和十四年度もまた三月から木曾駒連峰へわけ入つた。三月六日より十四日までの九日間、小島政他二名によつて北澤出合にテントを設置し、積雪期に於ける東川本谷の初週行がなされ、續いて十九日より二十五日にかけて伊那赤穂より木曾上松への積雪期木曾駒横斷が、加藤、跡部によつて新しく記録された。此の二つの山行に就ては會報八十七號の「積雪期木曾駒に於ける二つの行爲」を参照していただければ結構である。

四月にはいつて滑川の北股であり、前岳と麥草岳につきあげてゐる、そして何人も登攀は不可能であるといはれ、土地の人からも怖れられてゐた大崩谷への第三回目のアタツクが二十五日、小島政他一名によつて試みられたがならず、二十九、三十日に成瀬、野尻は上松より寶剣岳に登頂してゐる。

五月に至つて木曾駒連峰のいとしき存在である安平路山へ、加藤、黒田、跡部の三人によつて二十一、二十二日の兩日に亘り登頂せられた。ルートは飯田から西股川の源流をついて安平路山の東南二三〇米のピークの南の肩に出て登頂し、降路を

片桐松川へめざし、未踏である安平路山三角點から出てゐる大茂吉澤を下降、松川に出て越田峠を越えてゐる。續いて二十三日、跡部は伊那より權兵衛峠と神谷峠を越えて木曾宮の越へ出てゐる。

六月には一つの山行も数へる事は出来なかつたが、その反動でか、七月には俄然多くなり五つの山行が營まれた。二日、第四次の大崩谷攻撃が梅原、杉浦、中澤によつて試みられたが、又しても登攀を拒否されてならず、十五、十六日に小島政他一名によつて上松より、今迄白紙の儘の状態であつた滑川三ノ澤の試登が企てられ、これを詰めて三ノ澤岳へ登頂し、第二日は官田小屋より寶剣澤が下降されてゐる。十六日に坂野は須原から南駒ヶ岳、空木岳と登頂して赤穂への日歸り登山をなし、同日杉浦は他二名と共に上松より本岳へ登り、降路大崩谷を上部より偵察して福島へ下つてゐる。二十三日、須原から南駒ヶ岳へ、更に長驅して寶剣岳を越えて上松へ、所謂木曾駒逆縦走が、加藤によつて二十二時間五十分を以て遂行された。之によつて私達仲間の長い間の懸案があつたりと片付けられるに至つた。尙この行には中山山岳會の熊澤氏が途中思ひたれて同行し、寶剣岳より先行してゐられる。

例年の八月は穂高か、或は劍の方面に岩と雪を求めて夏期合宿するものが私達の常であるが、此の年は會員

の休暇の繰り合せがうまくいかず、合宿にかへて六日より八日までの三日間に亘つて木曾駒に集團登攀を行ふ事にした。之ならば、日数三日間あれば一つの山行を形成する事が出来、且つ出来る限り多人数の會員が行を共にし得るといふ點によつて計畫されるに至つた。

私達は木曾駒に集團登攀を行ふにまづ集中登攀をもつてした。併しそれのみでは手輕ないゝ相手である木曾駒に、私達として何んだかものたらぬものが感じられ、こゝに新たに分散下降といふのを加へる事にして臨んだ。集中登攀に一步を進めて分散下降といふ型式を加へ、より困難なるルートより登攀し、集中地點であり、更に次の出發基地となるきめられた一つの場所に集結し、此處に於てパーティーの編成替えを行ひ、より困難なるルートを下降しようといふのである。此の實現には相當考へさせられるものがあつたが、いつも親しんで來た木曾駒としてならば、これが可能性に對してきたる心配も要しないといふ見透しが立てられるに至り、これが實現の運びとなつた。

此の行を試みると、折悪しく颯風の影響を受けて連日雨と風の悪天候にさいなまれ、期待した收穫はなかなかつた。併し悪天候と雖全然動作を拒否される程でもなく、且つ第三日は午前中晴れといふ状態で

あつた。だが兎に角私達は登攀に六班を以つて當つた。けれど集散據點である伊奈川原頭千の千疊敷——寶劍岳伊那側直下の千疊敷とは異なる——にテントは設置出來ず、應急的に宮田小屋を集散據點とせしも、第二日の豫定集結日に六班のうち二班は到着せずして、分散下降の五班編成の豫定は變更されるの餘儀なきに至つた。

第一班の持田と人夫宮下による上松道より今度の集散基地となるべき伊奈川原頭千疊敷へのテント建設は、雨のために人夫が遅々として動かず、宮田小屋に至つたのみにて目的を達せずして終つた。第二班である坂野、野尻の正澤玉ノ窪澤の週行も、福島を振り出しに進められたが途中野尻不調で引返して坂野單獨となり、加ふるに雨のため行をなかにして豫定を變更、大原道より福島道を發行するに至つた。

杉浦、小島政による大崩谷登攀の第三班は、大崩谷の押し出しにて第一班、第四班、第五班と分れ、悪天候にもかゝらず敢然と大崩谷に戦ひを挑み、雨、霧、そして喚聲を擧げて襲撃して来る岩雪崩に身を挺して登高をつづけ、遂にこれを完登、大崩谷を志ざして以來攻撃すること五次に及び、私達の倦まざる努力に應へて茲に初登攀の凱歌があげられたのであつた。

第四班の中澤、伊藤による寶劍澤入りは、第五班と滑川の碛にて分れ

て滑川を週行、寶劍澤と玉ノ窪澤の出合下の岩小屋まで豫定通りの第一日であつたが、第二日は雨と濃いガスに目的の寶劍澤を見逃して玉ノ窪澤へ這入り、氣付きたるもそのまゝ左岸に登攀、だが健闘も空しく戦ひに利あらずして引返した。森、跡部の滑川二ノ澤より三ノ澤岳西南主稜を行く第五班も、入るべき二ノ澤がはつきりせず、一ノ澤と二ノ澤の間無名の澤にはいり悪戦、雨のオカシにして風越尾根より西南主稜へ迫りたるもガスに視界を閉され、暮る雨に涙をのんで敗退、降路も苦戦につぐ苦戦を以て東野部落へ出るに至つた。

駒ヶ嶺、加藤による第六班の中御所谷ワル澤登攀の第一日は赤穂より計畫通り進められて往つたが、雨に遮ぎられて第二日のワル澤入りを變更、中御所本谷を週つたがガスのために意の如く動けず、俣松に苦闘を重ねて漸くサギタルの頭に登頂した。

第一班はその日下山せしため、伊奈川原頭千疊敷のテント建設は、先着の第三班によつて引續かれたが風雨で遂行出來ず、宮田小屋を集散據點に變更し、連絡のに努力したるもついに第四班と第五班は姿を見せず、第三日目の豫定の分散下降は一頓挫を來たす結果となり、改めて未登頂のパーティーのルートの逆を下る事に決定を見た。

第一班として寶劍澤を杉浦、坂野

が下降し第二班は小島政、加藤によつて三ノ澤岳から西南主稜を二ノ澤乗越へ辿られ、二ノ澤を下降、滑川にて第一班と第二班と、そして登攀の第四班とが一緒に上松道を下つた駒ヶ嶺の第三班と敬神小屋にて合し、登攀の第五班のみ遅れて上松を獲し、全員歸名、茲に木曾駒集に登攀並に分散下降は終りを告げたのであつた。

八月に這入つて坂野と梅原は木曾駒集發行にならなかつた正澤玉ノ窪澤を二十日に下降し、未記録であつた此の澤を明らかにして驍憤を舞らした。

九月にはいと早々、小島政と梅原は大タルのある事によつて今迄登攀を拒否し續けてゐた未踏の中田切本谷に、兼ねての素志をつらぬくべく、一日、伊那福岡よりはいり、二日、問題の大タルを左岸にこなして週行に成功、空木岳に登頂の後南駒ヶ岳に至り、三日、須原に下山、茲に中田切本谷の初登攀が報告されることゝなつた。

秋山を慕つての十月の山行は三つを數へた。まづ八日に加藤、小島清の上松道より本岳登頂、福島道へ下山し、十四、十五日に之も木曾駒集發行に果さなかつた中御所谷ワル澤をめざして成瀬、野尻が出發。第一日に赤穂より中御所谷を週行して全然未知とされてゐるワル澤にはいり之を登攀、サギタルの頭と濁澤大峰との鞍部にとりつき、伊奈川原頭千

疊敷の岩小屋まで強行。第二日は福島へ下山してゐる。月末の二十九、三十日、之も木曾駒集發行にいちめぬかれた滑川玉ノ窪澤に對する言はど復讐の念に燃えて之に挑戦、パーティーは伊藤と他一名、先に弾き返された左岸の壁にとりつき、玉の窪澤の悪場を左岸通しに週行して玉ノ窪に出で本岳に登頂、第二日は風雪に豫定を變更、上松へ下山してゐる。

十一月は三ノ澤岳西南主稜の奇峰である蕎麥粒岳に食ひ込んだ、獵師さへも敬遠してゐた萩原澤北澤へ、成瀬、黒田、跡部によつて之が完登されるに至つた。三日の第一日は萩原から東野を経て萩原澤を週つて北澤へはいり、人を寄せつけなかつた大タルを右岸に絡んで右股、左股の出合下、蕎麥粒岳の直下に迫つてオカンシ、第二日、雨風に一層凄愴な氣の充つ左股に登攀、蕎麥粒岳に登頂して二ノ澤乗越に泊り、五日に西南主稜を週つて新雪の三ノ澤岳と寶劍岳を越え、夜道を上松へ下山してゐる。

……

木曾駒連峰の上にひかれて來た私達の昭和十四年の赤線に就て、概略ではあるがしるして來た。

斯うして辿つて來た足跡をふり返つてみると、其處に大きくうつし出されるのは、積雪期に於ては東川本谷の週行と本岳横斷であり、共に記録的な行爲であるといふ事が出來る。その後の山行に於ては、大崩谷

と中田切本谷の登攀である。前者は木曾側の登られぬものとされてゐた悪谷であり、挑むこと五回目にしてこゝに今迄かく閑されてゐた扉を始めて押しひらく事が出來たのと、伊那側の最後の大家であつた後者が、私達の努力の前にその全貌を明らかにされた事であり、共にこれらは「初」の字を冠していゝ登攀である。

少し粒がこまかくはあるが、伊那側に於ては未だ這入つた人もない中御所谷のワル澤、同じく片桐松川の大茂吉澤、木曾側では寶劍澤より悪い滑川の三ノ澤、土地の人からも見離されてゐた萩原澤の北澤などいづれも初登攀ものである。また正澤の玉ノ窪澤も記録されるべきもの、三ノ澤岳西南主稜の記録も同様とみていゝと思ふ。また滑川の玉ノ窪澤の左岸をゆくのも注目されていゝ登攀である。

斯うした記録とは全然性質を異にしたものであるが、木曾駒の逆縦走を日歸りでやつて來た事は興味ある記録である。此の縦走の實現は、昭和十二年、野尻の赤穂から福島へ、木曾駒本岳の日歸り横斷から端を發してゐる。而して昭和十三年、杉浦が上松から本岳へ登頂して寶劍岳、三ノ澤岳を越え、伊奈川を降路に須原へ日歸り出て以來木曾駒の一日縦走の可能性に就て私達の話題になつてゐたものである。昭和十四年に至つて南駒ヶ岳、空木岳を越へて、

須原から赤穂へ日歸りがなされて、技に木曾駒日歸り縦走の實現に對する見透しがはつきりするに及んで、遂に實を結ぶに至つたのである。

……

集中登攀並に分散下降に就て若干言及していただく。集中登攀は登山集團によつて屢々採られて來た山行の一つの型式である。異つたルートにより、山頂にて悦びの顔を合せ愉しく語らひ乍ら共に下るなど、全體が一團となつて山行を共にするのと異つて、深い感銘を味はふ事が出来る。之を逆に行はうとするのが分散下降である。

今迄集中登攀に對する様に分散下降といつた山行型態がこゝろみられてゐたか、従つて分散下降と謂ふ言葉が使用されてゐたか、私達は寡聞にしてそれを知らない。更に集中登攀に併せて分散下降を同時に、異つたルートをとつて登攀し、集散據點に會して新しくメンバーを編成して分散下降こゝろみた集團行動に就ても同じく知るところがない。何故集散基地に於てメンバーの編成替えを行ふかであるが、これは登攀に撰ばれたルートの難易と、下降ルートの難易とをうまく配合し、易から出た場合は難を、難から易へ、そしてメンバーの能力を考慮して多角的に組合せ、より以上の効果と收穫を得んが爲めである。

はゞまれて所期の目的と收穫を掴む事は出来なかつたから、その妙味に就いては今此處で兎角の論は避けねばならぬが、より深い歡喜を求めようとするものに考慮せられていゝ山行型態ではないかと思ひ、敢て一言附加した次第である。

以上記述して來たことどもは、客觀的に見て殊更に言ふべき程のものではない。又私達の木曾駒連峰に對する行爲を誇張せんがためにかゝる報告をしようとしてゐるものでもない。しかし、私達によつて營まれた山行の實體をあきらかにする事によつて、先輩諸兄の、私達の至らざる處に對して教示を仰ぐことが出来る、且つ今後の指導を只管乞はんとする意志以外に何物もない。而して木曾駒連峰に關心をもたれた人達になにか寄與する處があればといふ事に盡きる。

木曾駒の稜線に立ち上つてゐる雪煙に思ひをはせ乍ら、その上に何一層の精進を重ねて行く事を、私達はひそかに念ずるものである。

(一五、二、二五)

北鎌の多門治氏逝く

小野 幸

槍の北鎌尾根の新道、多門治新道を開いた大町の竹村多門治氏は去年の十一月に他界された。彼は高瀬入の濁小屋と湯俣温泉小屋の所有者でもあつた。

湯俣小屋から水俣の道を過ると千丈澤と天丈澤の分岐へ着く。道は左の天丈澤に沿つてなほ登つて、橋を渡ると間もなく多門治新道の北鎌登り口へ着ける。何年か前の北鎌登山者は北鎌の標があつた事を思ひ出すであらう。然し、現在の岩を求め人々はこの登り口をとる人は餘りない。なほ先の北鎌澤を登り、北鎌尾根北方の樹林帯をさけて早く獨標へ攀らんとする。

そんな關係で現在ではあまり利用はされて居らぬが、北鎌完全縦走路としての多門治新道はやはり特記してもよいのではなからうか。少らく氏の簡単な履歷を述べて彼を偲んで見ようと思ふ。

多門治氏は若い頃から營林署の御用商人として出入して居た關係で署員の連中とも親交があり、生來の山への憧憬も手傳つて署の人に進められて濁小屋を得たのだ。當時は烏帽子へ行く登山者が大町から入つて第一目の泊場として可成り利用されて居たが、その頃からそろ／＼葛温泉への軌道利用や道路開改良と共に時間の短縮により段々利用する者がへつて來たのである。濁は終いにほんの晝時の休場として、一氣に烏帽子小屋へ登つて了はれる様になつたのである。

氏はそれから八方をさがして適當な小屋場をさがして居た。その時、湯俣の湯場に小屋を建てれば北面から槍へ登る面白いコースが出来ると

らうと着眼したのであつた。當時その土地の權利を得るには競走者も可成澤山出て、やつと昭和三年氏に許可が下りたのであつた。それから氏は湯俣には全身を打込んで居たのであつた。

湯俣の權利を得てから氏は槍の北面、高瀬入の湯俣温泉を紹介せんと努力して居た。まもなく營林署の許可を得て北鎌尾根に新道を作つたのは昭和六年前後と思ふ。之が多門治新道と云はれるコースなのである。

現在では北鎌澤が多く利用されて居るのは、湯俣小屋から強行の一日で槍の穂先に立てる所から利用する點もあるのだ。多門治新道はどうしても尾根で一晩オカンする事と登り口の切開きが相當分りにくい所から少ないのだと思ふ。

なほ此後の濁及び湯俣小屋は息子の竹村正氏によつてつかれて居る。湯俣小屋を泊場として天丈澤から槍、湯俣岳から水昌小屋、高瀬トロ道からはなれて燕岳、天丈生活、赤岳、千丈等へ一般にはあまり知られざる面白いコースも選べる所である。

氏は實に山が好きで、小屋に泊つた登山者と一夜を語り明かしたと云ふ事も度々あつた様である。酒をチビリ／＼とやつて小屋を、槍を、高瀬を、大町を語る氏の面影を御存じの方もあると思ふ。

氏は明治十二年十月三日生れの享年六十一才であつた。合掌

雪中戦に不死身

【〇〇にて田村特派員二月八日發】吉岡部隊の渡邊公平中尉は今次蒙古平原の大雪中戦で敵軍を二ヶ所に受け重傷の身ながらも能く察令の中に數時間指刀を揮つて部下を激勵、五原を守る敵の據點烏鎮陷落の端緒を作つた剛勇振りは山男の眞價を發揮したものと、全部隊の激賞を買つて居る。

剛勇の山男渡邊中尉を〇〇野戰病院に訪ねると左手を痛々しく纏帶して居るが案外元氣で「山の經驗のため凍傷にかゝらず助つたよ」と冒頭し次の如く語る「元氣者の壬生一等兵が眞先に負傷したといふので驅け寄せ途中胸部と左指にチエコ機銃彈を受けたが、胸部の傷は早大岳部員の記念の煙草入に中りそのため輕傷で済んだが、左指は中指と薬指とのつけ根がやられた、激戦のため部下は續々仆れる、僕の外にもう一人南原博明中尉(静岡縣三島町出身)も奮戦中胸部に激弾を受け名譽の戦死を遂げた、山の經驗からこの寒さでは傷口から必ず凍傷を起すと直感したので出血を止めると手を厚い手袋や毛の首巻その他で出来るだけぐさ／＼巻にし凍傷になるのを極力避けて午後四時から午後十二時まで指刀を揮つて進め進めと前進したがとう／＼最後に意識を失つて野戰病院に擔ぎ込まれたのは午前三時だつた。大概の負傷者が傷口なら凍傷ばかり手や足を切られねばならぬ人が少くないところが僕は例の針ノ木峠の雪崩でひどい凍傷に罹つた經驗が戦争に來て尊いものとなつた譯さ、指は今のところ一本切れるか二本切るか判然しないけれどもロツク・クライミングはもう駄目だ。」

(東京朝日新聞より)

ベテガリ隊の 遭難に就て

北大山岳部

(編者) 一月五日ベテガリ登山隊員の雪崩遭難に就て北大山岳部より左の報告を寄せられた。これは既に一部新聞紙上にも發表されたものであるが、未見會員のために全文を再録し、併せて深き弔意を表したい。

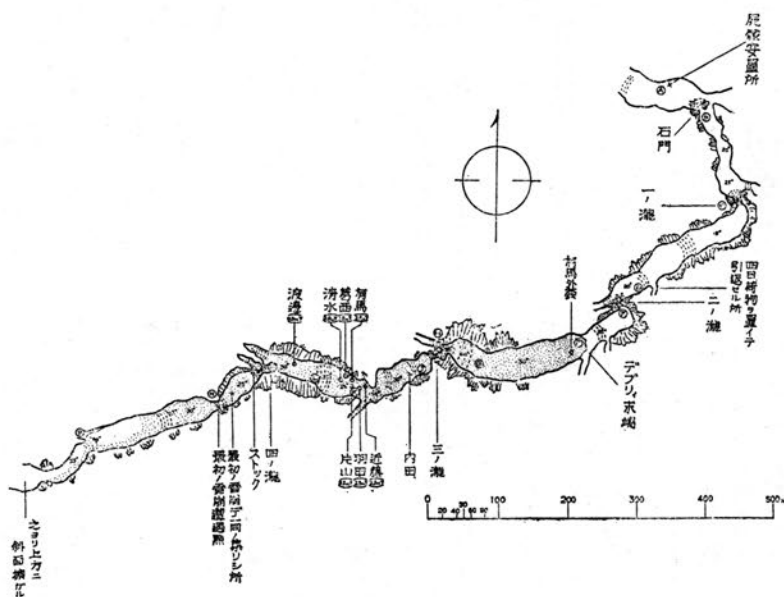
今回のベテガリ登山隊の遭難事件に就いては既に當時の新聞紙上に詳細に亘つて報道されたのであるが、吾々はここに本紙上を借り遭難當時の真相を公表し、一つには世上一部に誤り傳へられたところを正し、一つには吾部全體としての責任を明かにしようと思ふ。この機會に當り、今回の遭難に對して多大の御同情と御援助とを賜はつた各地官民各位に對して深甚なる感謝の意を表する次第である。今日のベテガリ隊員の遭難前日迄の行動、搜索隊の編成、行動、作業經過等に關する詳細は、總て之を當部の近く發表する記録に譲り、ここには遭難當時の真相に就てのみ簡潔に記述することにす

る。
遭難現地の地形に就ては搜索隊員の簡易測量に依り挿入圖の如く、谷の幅、長さ、傾斜、デブリの長さ、遺體並に遺品の發見個所等に就き正確に知ることが出來た。(但し本圖に

於て谷の幅は實際より著しく擴大されてゐる。)

當時札内川一帯の積雪状態は、一月三日に濕雪が約五寸風を伴つて降り、四日強風、五日即ち遭難當日は幾分濕氣を帯びた粉雪が積りつゝあ

て更に荷を加へ、スキーを使用し迫り合つたコイカクシユサツナイの谷を側方からの雪崩に注意しつゝキツクターンを重ね登行し續けた。谷には數個の瀧があり、瀧の部分は急峻であるが、瀧と瀧との中間は比較的



り、ベースキャンプに於て午後四時頃迄に一尺餘に達した。隊員は前進キャンプの用意をなし、朝九時ベースキャンプを出發したが、其時雪崩の危険は念頭になかつた。D地點に

傾斜緩く、此日の積雪状態では此の部分に於て雪崩を生ずる如き地形ではなかつた。隊員は第四の瀧を経て次の崩傾斜の部分を経過し、五ノ瀧Nを登りつゝあつた時に第一の小さ

な雪崩が発生した。此雪崩は先頭の二名を除く七名の隊員を約二十米程下方に流したに過ぎなかつた。此は急斜面を階段登りしてゐた隊員のズリ落ちによつて起きた粉雪表層雪崩であつて、スキーのスパールが雪崩を切斷した爲に隊員の上方の雪が落下したのではない。隊員一同が五ノ瀧の直下に再び集合し終へた時、遙か上方より落ち來つた雪崩がすぐ上方の五ノ瀧を越え雪煙をあげて奔騰落下し來つたのを認めたと同時に隊員九名は此雪崩に流し去られた。此の第二の雪崩は搜索隊調査班の現場に於ける觀察判斷に依つても其の發生地點の限界を明確にすることは困難であつたが、デブリ中に偃松の小枝が混入すること(コイカクシユサツナイ川側にては國境山稜の近く迄登らざれば偃松地帯に達せず)、谷の地形は圖のAよりQに至る間兩側の谷壁には大小の突入あり且つ谷底には幾つも起伏があること、又デブリは非常に厚く且つ甚だ長大なること等よりして、雪崩發生の地點はコイボク札内岳頂上附近、即ち隊員の在りし位置より遙か上方に起つたものであることは疑ひを容れない。又圖に示す如く、當時隊員の在りし地點の五ノ瀧附近で谷はくびれ瀧の上部はしばらくの間緩傾斜である。此が爲め第一の雪崩に依る積雪の變化が大なる雪崩を誘發する如き影響を上方まで及ぼすものとは考へられず、又其の上方Pに至る間にも

尙デブリの認められたことは第二の雪崩が隊員の行動により誘發されたものではなく、自然發生に依るものと推斷される。

要するに雪崩發生の原因は、一月三日の濕雪が四日の強風に壓縮され、表層硬化したる上に五日の粉雪が其の時刻迄に一尺近く或はそれ以上積り、頂上直下の最も急峻な斜面の部分に於て自らの重量に耐へず、新雪表層雪崩として自發的に落下し來つたものと考へられる。

次に今回のベテガリ隊が何故に谷を登路として採つたかに就いて一言する。コイボク札内岳に到達する登路としては谷を直登する外に、他に側稜の登行が幾つか知られてゐる。然しながら側稜の登行は常に輪標を用ひても胸迄も深雪にぬかり、ブツシュに惱まされながら重荷を負ふて登らなければならぬ。之に反し、溪谷中を安全なる雪積状態の下に硬締雪の斜面はスキー或はシュタイグアイゼンを用ひ、數ヶ所にある若米の瀧の所のみステップを刻みつゝ登行することは時間的にも勞力的にも比較にならね程有利である。隨つて此谷も恵まれた條件の下に既に數回登降せられて居る。昭和十三年度のベテガリ隊は此谷の状態が安全であつたために、隊の各斑は極地式運搬法に依り幾度となく直登降を反覆した。其の當時の状態は當時参加せる隊員が今同回想して判斷するも猶安全であつたことを斷言して居る。

又日高山脈に於て谷の状態を左右する天候は冬期に於ては夏期に比しむしろ安定せる天候が続くものと知られて居る。今回の捜索作業期間中も谷、山腹の状態は甚だ安全なる條件の下に置かれ、充分なる安全感の下に作業を繼續し得た。事件發生より十日後の一月十五日に降雪があつて再び危険性を認めた爲止むなく作業進行を中止するに至つたものである。遭難隊員は當日谷を可成り上方面まで直登し得る状態にあると判斷し全員を三班に編成し、當日出來うれば前進キャンプを國境山稜上に設置し、一班は再びベースキャンプに歸る豫定の下に、時間及び努力節約の目的でスキーを出来る限り高所まで使用し、遭難地點に到達した。然るに此の遭難に於ける雪の状態及び時刻を考慮し、N地點に荷を置き隊員全部下降の決心をなした時、不幸第二の大雪崩に襲はれたるものである。遭難時刻が午後三時半なる事は冬期登山の概念からして、かゝる時刻まで登山を續けてゐたことが通過したのではないかといふことも一應は考へられるが、しかも此の地點まで登行を容易ならしむる爲めスキーを使用してゐたことが又下降に際しても約一時間でベースキャンプに歸り得ることから考へて危険を冒してゐたものとは認められないと思ふ。

眞因は結局雪崩の成因に關する吾々の經驗知識の不足にあつたのであつて、當部十餘年の不斷の研究を以てしても、尙且つ足らざるものがあつた。茲に明白にその不明を天下に謝するものである。當部創立以來、特に日高山脈の登山的開發に全力を擧げて精進し來つたのであるが、今回の餘りにも貴重な犠牲に依り、大自然の法則に關する吾々の知識、經驗が如何に微力なものであるかを、吾々は痛切に反省させられたのである。先輩、現部員一同擧つて之に對する責任を感じ、今後こそ眞に眞摯謙虛なる態度を以て、雪崩に對する研究は勿論、あらゆる觀點より登山技術、登山精神の向上發展に努力し、崇高なる人格の陶冶といふ登山最高目標に向つて精進することより以外に、世の期待に應へ同時に亡き岳友の靈を慰める途はないと信ずる。ここに今回の遭難顛末を公表するに當り、今後とも諸方の御鞭撻と御後援を賜はらんことを切望するものである。(昭和十五年二月)

白馬樺池小屋附近に於ける表層雪崩遭難に就て

石原 巖

去る二月十八日、友人六名と白馬樺池小屋附近をスキー滑降中、不幸にも相當大きな表層雪崩に遭ひ、多くの方々に御心配をおかけしたことは恐縮に堪へない。またこの事故で自分達は過去二十年近くまで廻るこ

との出来る最も親しい山友達の鹽川三千勝君を失つて隨分大きな精神的打撃を受けた。そのために餘り筆も進まないものであるが、取り敢へず當時の状況を有りの儘に誌して、お詫びに代へたいと思ふ。

雪崩の發生せる箇所は白馬館經營樺池小屋の背面(北側)より直ちに天狗原に續く標高差二五〇米程の斜面であつた。これは通常スキー登路に選ばれる小谷の西側に隣るコンケイの浅い廣い谷で、兩側には岳樺の疎林を有し、最大傾斜三五度位と思はれ、その邊りにも數本の樹立がある。この更に西隣の大きな谷よりは從來屢々雪崩を發生し、筆者も嘗て小屋前の丸山を通り過ぎて堆高くデブリの堆積したのを見たことがあるが、今回の谷から自然發生的に雪崩の出たのを見たことはないと思ふ。内郷津長平は言つてゐる。

事故發生の前日、即ち二月十七日までの數日間は比較的暖かい好天候が続いたとのことである。殊に一行の登山せる十六日午後より翌十七日午前にかけては冬に珍らしい程の快晴で、三米程の積雪もよく締つて落著き、現に一行は天狗原よりの歸途同じ谷を可成りの安全感を以つて快適に滑降した。十七日午後より風雪に變り終夜小屋を揺がす程荒れ狂つて積雪約半米に達した。十八日午前十時頃に至つて稍と勢衰へた如くであつたので、附近でスキー練習をする位の心算から用意の整つた者より

順次根據とした成城小屋を出て上方に向つた。

ラッセルの深さ約三〇糎、氣温は極めて低いと言ふ程ではなく、雪は高山にしては幾分濕つて重いやうに感じた。一行は西南の強風に抗しつゝ通常のコースたる尾根筋を先頭のスパールに従つて發行したが、時々視野は二〇〇米程に展げ天候好轉の兆を認めたので、漸次高處に至り午前十一時すぎ天狗原直下に達した。茲で前進を斷念し、歸途樺池小屋經由、適當な場所までスキー練習をすることにして、素早く海豹皮を脱しこの谷へ向けて相前後して滑り初めた。雪面はこの風にも拘らず殆んどクラストして居らず、且つは前日同じところを滑降せるためか、残念ながら殆んど危険を考へなかつた。

鹽川は最も果敢に速力を出して間もなく先頭に出で、谷の急斜部にかゝるや大きな弧を描いて數回の連續ターンを行つた。同じ頃次に續いた坂本、井上の兩名は五十米程手前で相次いで第一回のターンを試みたのであるが、突然足許が不安定となり崩れる雪の上に倒されると同時に、雪崩に捲き込まれたことを意識した。雪煙に捲かれつゝ流され乍ら兩名は必死になつて藻掻き、幸運にも表面に浮ぶことを得て、約四〇〇米を押し流されて静止した。この際兩者は約一〇〇米離れた位置に在り下半身及び首まで雪中に埋つてゐたのを、辛うじて自己の力で這ひ出すを

得、杖各一本を失へる外何等の怪我はなかつた。鹽川のみは雪崩發生時の位置よりして當然主流に入つたらしく、その姿は見當らない。時に午前十一時半頃で、雪崩は殆ど音もなく全く瞬間的な出來事であつた。

この雪崩は恐らく滑走の衝動で誘發せるものゝ如く、斜面傾斜三〇度前後と思はれる部分の、前日來積つた新雪は附近一帯に亘つて悉く崩れ落ち、その上方には割然たる切れ目が三百米程も無氣味に連つてゐた。底面の舊雪面は極めて固く表層雪崩を惹起する一つの條件をなしてゐたことは確かである。雪崩の先端は樺池平へ約二五〇米程も押し出し、發生點よりの總延長八〇〇米餘、最大幅二〇〇米、最深部約二米と推定された。デブリは勿論停止時の壓力によつて極めて固く凝固し、多少の折れた樹枝を混へてゐた。

前記雪中より這ひ出した兩名、及び後に残つた筆者等は直ちにスキーを脱し、杖又はスキーを以つて探査を開始すると共に、一名は麓へ急行して入夫の應援を求めると同時に、事故發生直後より空は拭ふ如く晴れ渡り、捜査も大いに捗つたが、範圍餘りに廣大なるため手懸りを得ず、日没と共に寒氣頗る厳しく止むなく一旦小屋に引揚げた。

翌十九日早朝より前夜來登山した人夫二十六名の應援を得て、探査を再び開始し、午前九時半頃に至つてデブリの平地に移るあたりに、

雪面下約一米半、仰向けとなり眠れるが如く横たはる鹽川を發見、直ちに風蔭を作り、人工呼吸二時間、カンプル注射四本、その他の手當を交代にて試みたるも遂に甲斐なく一同暗涙に咽んだ。樺池小屋北西方約五〇〇米程の地點である。

同君は片方の杖を手袋ごと失へるのみで他は殆ど異状なく、たゞ前齒八本を折り、肩甲骨に打撲傷あり、大の字に伸びて、何等苦悶の色も藻掻いた形跡もなかつた。察するに雪崩通過路に在つた樹幹に衝突して氣絶せるため、殆ど脱出の努力をなし得ず、深く雪の下となり、窒息死又は凍死せるものならんと思はれる。雪崩が餘り大きかつた爲、僅かの人數を以て急速に發見、處置するを得なかつたのは、返す／＼も残念に思はれる。

鹽川君は過去二十年に近い冬季登山の經驗を有し、筆者も嘗て彼が傾斜計を買ひ込んだり、ラヴィーネンシュメルや、締具を外れ易くする等のことに就て苦心してゐたことを思ひ出す。また今回同行せる一行は各自樺池附近には數回の經驗を有し、筆者も天狗原と乗鞍岳間の大斜面で雪崩に遭遇したこともある。要するに今回の雪崩發生を豫知し得ない程に全く無知であつたとは思はない。然し乍ら事故そのものゝ性質は山に於ける最も初歩的なものであつたことも否定出来ない。畢竟するに餘暇に乏しい我々が、僅かの時間を最大

限に利用しようとする結果、或る場合には今度のやうに全く山の明い面しか見ることにならない。山へ行つて各々の好きな方法で出来る限りのレフレッシメントを得て来ればいいと思ふ。このあたりが學生時代のやうに山に打ち込んだ生活をしてゐた時分との違ひではなからうかと思ふのである。最も安全だと思つてゐた場所は、却つて最も危険なところであつた。

簡単ながら有り餘の儘を誌して御批判を待ち今後の精進の糧としたい。

冬のゼム氷河附近 四

ジョン・ハント

望月達夫 譯

(一) パッサンラム溪谷の下降

(二・二二—二・二六)

C・R・クック記

十一月廿一日、ハントと私は、ダ・トンダップ、キクリ、バサンを伴ひ、十二日分の食糧を携行してシムヴ・サドルに向つた。ハントは寫眞撮影の爲と、軟雪に足跡を作る爲に暫く同行することゝなつた。軟雪中の行進が至つて勞多いものであつた爲、彼の與へて呉れた助力は洵に効果的であつた。私の計畫はパッサンラム氷河を降り、その西側の尾根を越へてトンション溪谷に這入り、更にグイチヤ・ラを越えてダージリンに歸還すると云ふのであつた。ネパール・ギャップ偵察中は全く

理想的な好天に恵まれたけれ共、この行ではそれ程幸運ではなく、遠望が利かない爲に、遂にトンション氷河に到達することは出来なかつた。廿二日の朝ハントと別れてから、バサンと私はサドルを越して、とある淺いクレヴァアスの中に天幕を移動し、ダ・トンダップとキクリとはB・Cの間を往復して殘餘の食糧、器具を搬んでくれた。前日の足跡は、風に吹き寄せられた雪の爲殆ど消されてゐたので、彼等の果した勞働は全く言語に絶するものであつた。この間吾々は豫定のルートを偵察したけれ共、クレヴァアスに妨げられて、充分に目的を達することは出来なかつた。

穩やかな夜が過ぎて、廿三日の朝が美しく訪れた。眼下にはタールン溪谷近くの光景が見られたが、パッサンラムの谷を満たした雲海は、ぼゞ吾々と同高度の一八、〇〇〇呎の高さ迄達してゐた。それで雲が低く下らない中に、素早く私は反對側の山のルートに記録した。かくて吾々は下降をはじめた。先づ手強いロツク・チムニーが現れた。バサンは危なつかしいセラックスの下を通つて、その左手に取付き、チムニーの底に達した。次いで荷物がおろされた。進行は遅く、午後一時迄にまだやつと四百呎を下降したのみであつたが、續く六百呎の雪斜面に至つては、濃霧と降雪の合間にも速かに通過した。吾々はシムヴ側の氷瀑

の先端に達しやうとして、右手の方へ斜めに下つて行つた。次の容易な岩場を少し下つてから、ダ・トンダップとバサンは先刻のチムニーまで戻つて荷物を搬び、キクリと私は更に雪面を横切つてキヤムブ・サイトを切り開いた。

翌朝未明にはパッサンラムの谷は晴れ上つてゐた。私は谷の西側を越えるルートを見に出掛けしたが、急峻な絶壁に阻まれて了つた。それで前日のルートを引返へし、サドルから垂下せる氷瀑沿ひに下ることに決めた。下降に際しては、セラックスに細心の注意を拂はねばならず、又キヤムブから約二百呎下方では、困難な岩場にあつたり、荷物は一々搬ばねばならなかつた。此處で、バサンは大膽なロツク・クライマーのみが能くなし得る技術を充分に發揮してくれた。視界は至つて狭く、濃霧の中に次々に現はれるクレヴァアス、デブリ、セラックスの間を、多大の苦勞を重ねて下つて行つた。

り過ぎてゐたからであつた。重い罐詰の食糧、ジャム等を開け、それ等を適當な塊にして、少しでも荷を軽減するやうにさせた。

廿五日の朝が希望を以て訪れた時吾々は前方約一哩の彼方の雪原に向つて、美しい眺望をたのしみつゝ、程良く締つたクラストの上を下つていつた。然しシムヴの急な雪面に達するや、既に降雪が始り、視界は前よりも遙かにかきられて了つた。傾斜三十五度乃至四十五度の斜面に積つた深雪中の行進は、最も苦痛な一日の行動であつた。吾々は時間を決して空費してはゐなかつたが、少しの油斷も許さぬ行程の爲、實に多くの時を要した。四時半頃であつたが突然前面に眞白なモレーンが現はれた。それを乗り越えんとした時は既に晩く、その向ふ側に漸く天幕を張つた。吾々は全く雪達磨の様になつてゐた。そして夜通し雪崩の咆哮に打震えた。この雪原の位置は奈の邊であるか、全然見當がつかなかつた。この地域の正確な地圖は未だ作られてなかつたからである。それで早朝の時間に出るだけ見通しをつけてをかうと、翌日は暗い中に出發する豫定であつた。がこれは失望に替る外はなかつた。

夜通し雪は降り續き、曉方は更に烈しく降つてゐた。注意深く今迄の行程を反省してみるに、吾々はまだシムヴの北僅かの地點迄しか下つてゐないことを知つた。一層ゼム氷河

へ引返へそうかと考へた。然し人夫達はそれを欲せず、バツサンラム氷河の下降を續行し、タールン溪谷との出合に達して、事情が許せば其處から又グイチャ・ラを越すことを、しきりに勧めるのであつた。食糧を調べてみると、まだ十二日分位は大丈夫であることを知り、遂に下降を續けることに決心を固めて、モレーン傳ひに素早く二百呎を下つた。それから右側をとつて氷瀑をぬけ、更に下降を續けた。晝頃いかな雲の下を抜けると、嬉しいことに遙か下方には河水の流れを認めることが出来た。一時半、氷河の舌端を通過し午後四時、突交りの雨の中を、バツサンラム川の畔りに天幕を張つた。

廿七日の朝は未だ烈しく雪が降つてゐた。雨に濡れ、氷り附いた天幕や寝具を畳み、深々と雪を冠つた密林の中に勞多い一步を踏み出した。行進は相變らずはか／＼しくなかつたが、やがて廣々とした河原に出て樂な前進をすることが出来た。しかし直ぐ又深い森林の中に這入らねばならず、更に河水から離れて高捲きを強ひられた。午後四時頃であつたらうか、行手を阻むほど垂直な壁の爲綱に頼らねばならなかつた。次いで灌木を切り開き天幕が建てられ、其の夜は久々に巨火を燃やして、濡れ物を乾かした。

だが雪は夜通し止まなかつた爲、翌朝は又改ためて乾かさねばならなかつた。吾々が出發した時も尙美が

降つてゐた。行程は絶望的な迄に涉取らなかつた。それはこの溪谷の東岸は急峻に落ち込み、その岩壁、尾根には灌木や木立が極度に密生してゐるが爲で、一時間に約四分の一の哩位しか進むことは出来なかつた。川の狀態を見やうとして、六百呎以上も足場を切つて下つたことは一、二度ではなかつたが、河水が深い峡谷にたぎり落ちてゐる以外には何も見ることは出来なかつた。嘗てこの方面からタールン溪谷へ這入つた獨逸の連中が、並々ならぬ困難に出喰はしたことや、又タールンの谷は文字通り原生林に覆はれてゐることを聞き知つてゐたので、私は再び食糧の缺乏を心配し始めた。そしてタールンとバツサンラムの出合に聳立する約一萬呎の岩塔を長いこと見上げてゐた。吾々がタールンの河水に着く迄は、まだ二日位はかかるであらう。グイチャ・ラを越える計畫は、この谷の西側の險惡な狀態と惡天候の爲に放棄せらるべきであつた。午後キクリは大發見をやつた。即ち彼は約一週間位前に人間の切り取つた羊齒の一片を見附けた。これを手がかりとして、獵師のかすかな足跡を求めつゝ、遂に立派な岩小舎に到達した。そこにはレブチャの獵師達が残していつた、興味深い竹製の食器と笛とが見出され、記念に私のナイフと取りかへつこして其れを持ち歸つた。

廿九日は、獵師の作つた跡跡を發

見する事が出来て更に嬉しかつた。行程は益々困難の度を加へ、この跡が無かつたならばタールン河迄更に四五日を要したであらう。斯くしてこの思ひがけないルートに導かれ六十度もある急な岩場を下りて、河水に達したが、其處には竹製の橋が架せられてあつた。之を渡り、跡跡を求めるのに少し苦勞はしたが、川の右岸を曲進してタールン河との合流點近くに出た。こゝにも竹の架橋があつて之を渡り、タールンとバツサンラムとを分つた尾根の稜上迄八百呎を急登した。其處を切開いて森林中の草の褥の上に星を載いてねむりに就いた。幸運も訪れてきた。天候はすつかり定まり、その上夕刻には天幕の下方に野生の豚——それは確かについ最近墜死したものらしい——を見出した。肉は眞新らしく、短刀を抜いて早速肉を切り、四十封度近くを獲ることが出来た。

次の朝、希望に満ちた吾々は遂に道らしい道に出た。一時間後には最初のレブチャの部落を通過し、彌々人間の道に合したことが、面白い程に嬉しかつた。タールンとテイスタ本流の合流點なるマングンへは十二月の二日、そしてサムドン、ダムトリン、ナムチ等を経て、六日にダージリンに歸還したのであつた。(終)

昭和十四年度
收支計算報告

収入

圓

入會費	四九二・一六六
諸利息	一四五・〇〇
廣告料	二四・一一
雜收入	一〇・〇〇
山岳賣却其他	一五・九五
基本金より借入	五六・一一
前年度繰越金	六九・一三
合計	二九四・三八

支出

圓

山岳印刷費	一五一・六三
會報費	六五五・八四
編輯費	六九・四五
借室料	九三・〇〇
研究調査費	一五・〇四
集會役員會費	一六八・〇一
室内設備費	三三・七九
人件費	四九・〇〇
旅費	二五・九三
通信費	三九六・八三
用紙文具費	二〇八・七二
電話費	七一・三三
雜費	九四・七六
臨時費	四八・〇〇
關西支部費	八五六・五五
次年度繰越金	一〇五八・一〇
合計	六七八・三四

變贈會報部報雜誌

日本雪線山岳會	雪線
大阪商科大学山岳部	雪線

熊本アルカウ會	會報
獎健步行會	步行會
厚生日本社	厚生日本
廣島山岳會	廣島山岳會
法政商業山岳部	法政商業山岳部
關東旅行クラブ	關東旅行クラブ
昭利山岳會	昭利山岳會
昭利山岳會	昭利山岳會
國立公園協會	國立公園協會
登山とスキー社	登山とスキー
關西學生山岳聯盟	關西學生山岳聯盟
阪神山岳會	阪神山岳會
橫濱山岳會	橫濱山岳會
東京登歩溪流會	東京登歩溪流會
朋文堂	朋文堂
日本アルカウ會	日本アルカウ會
福岡山の會	福岡山の會
東京アルカウ會	東京アルカウ會
中京山岳會	中京山岳會
偃松山岳會	偃松山岳會
東京市役所山岳部	東京市役所山岳部
臺灣山岳會	臺灣山岳會
三高山岳部	三高山岳部
日本旅行協會	日本旅行協會
趣味登山會	趣味登山會
IMC山岳會	IMC山岳會
峯嶺會	峯嶺會
東京山岳俱樂部	東京山岳俱樂部
安田銀行山岳部	安田銀行山岳部
京都山岳會	京都山岳會
東京嶺山岳會	東京嶺山岳會
七十七銀行山の會	七十七銀行山の會
東京山岳會	東京山岳會
高千穂高商山岳部	高千穂高商山岳部
東京地學協會	東京地學協會
山岳	山岳
泉ヶ嶽	泉ヶ嶽
山彦	山彦
地學雜誌	地學雜誌

新著紹介

氷雪に挑む (既報)

寫眞集「氷雪に挑む」を観る。評者は編輯後記にもある様な編者の意圖には賛成だし、又好意をもつ、寫眞も好いし、又山岳部の撮影者も新人が多い様に思はれるのも頼もしいと云ふ氣持を抱いた。だからこの寫眞集は八十八葉に及ぶ多數を集めながら甚だ狭い範圍の山しか現はれなくとも評者にはなんとも感ぜられなかつた。

山岳寫眞に人物を入れることは仲々困難なことで私なんかは出来るだけ撮らないことにして居る。所謂記念寫眞にはよいかも知れないが人物があると煩い様に感ぜられる。出来るならば人物なんか見えるか、見えない様なそれが寫眞の主題とならない程度が好ましい。だからこの寫眞集にもある四十九、五十圖の様に人物が大きく寫されると前者は山案子の様であり、後者は脱覗きの様な感じがするが、他の多くは破綻が少な

い。

スキーの部に於ては八甲田山の寫眞には随分良いものがある。立山に關するもの一枚、凡作である。私は彌陀ヶ原を中心とした山岳の寫眞位撮りにくいものはないと考へて居る。だからこゝ十年來一度乃至三度も登山してその收獲數千枚に

及ぶ中野峻陽氏の作品にしても吾々を唸らせるものは少ないのである。最後の山小舎の寫眞三圖はいさゝか蛇足である。この最後の切上げの惡さをみて、かつて竹節作太氏のナン

ダコートの最後に詰らぬ印度洋の寫眞が二葉もあつたのを思ひ出して切上げの悪いのは日本のレビニユばかりではないと思つた。

スキー技術を撮した寫眞も見馴れた故かジャンプ二題(六十一、六十二回)等も詰らぬ。事實もさうである様におみせしませうと云ふ様な動作の寫眞には眞剣味が感ぜられな

い。いつそ競技ジャンプの寫眞の方には氣魄が感ぜられ、本集の意圖にもそふものであらう、六十三圖には好意がもてるのもそんなためかも知れない。

全部門外不出とあるが、北岳、富士山に關するものは部報、針葉樹、雜誌、週刊朝日に夫々掲載されたものである。

各寫眞の説明はおしつけがましく饒舌にすぎる。これをよんで無聲映画時代の安價な寫眞の字幕を思ひ出したのは筆者一人か。

總じて編輯者の意圖は酌まれ好意のもてる寫眞集と思ふ。(山想堂)

ゴビよりヒマラヤへ 大陸叢書第一卷 F・ヤングハズバンド著 笈太郎譯 昭和十四年十二月 朝日新聞社發行 四六版二四一頁 ヒマラヤや中央亞細亞の山に關心を持つ吾々にとつて、ヤングハズバ

ンドの名前は既に親しい。本書は彼の第一回の中央亞細亞行を記したもので、原書は「Among the Caucasus」一八八六年、先づ滿洲に至つて長白山脈を跋渉し、次いで蒙古より天山南路を通つてカシニガルへ、更にムズタグ峠にてカラコラム主脈を越えてスリナガルに出た、中亞

探検史上餘りにも有名な旅行の敘述を納めてゐる。本書は元來一般讀者の爲に書かれたもので、地理的敘述を求める人々には、かなり食ひ足りないが、探検家としての彼の生ひ立ちや、僅か二十四歳にしてかゝる大膽な探検旅行を敢行したことや、又何等登山用具もなく氷雪のムズタグ峠を越へたことの描寫等、興味盡きざるものがある。

譯語には幾分首肯しかねるものもないではないが、譯文は全體として読み易い邦語となつてをり、簡単な譯註も添へられてある。

只此の種大衆を目ざした書物としては致し方ないが、地圖が如何にも貧弱である。切角折り切みの地圖を入れたからには、今一步を進めて、地名、河川山脈名等詳細を期してほしかつた。(T・M)

Five Miles High Edited by Robert H. Bates New York, 1939 \$4.00

之は既に御承知の方も多と思ふがC・S・ハウストンを隊長として米國から派遣された一九三八年度のK2の遠征報告である。此の遠征隊が二六、〇〇〇呎まで達した業績につ

いてはもう「山岳」誌上に發表してあるから内容に關する御紹介は茲ではやらない。私自身まだ机の上に置いてあるきりでよく讀んではゐないがシヤットコ張つた書き振りでなく面白く讀める。編者はベイツで各章分擔して執筆されてゐる。次にそれを並べて置かう。

- 一、發端……………ハウストン
- 二、地理及歴史……………バードサル
- 三、ビスナトと靴……………ハウストン
- 四、カシミールへ……………ベイツ
- 五、ゾージ・ラ……………
- 六、印度河の道……………
- 七、最後の村へ……………
- 八、遂にK2に……………
- 九、最初の偵察……………ハウス
- 一〇、ゴ・オーステン氷河を遡る……………
- 一一、アプルッチ稜……………
- 一二、攻撃……………
- 一三、最後の幕營……………ハウストン
- 一四、五哩の高さ……………
- 一五、退却……………
- 一六、氷と角度……………バードサル
- 一七、豐饒への途……………

附 録

- 一、カラコラムへの遠征隊……………バードサル
- 二、行動日誌……………ハウストン
- 三、裝備……………
- 四、會計……………バードサル
- 五、食糧……………ベイツ
- 六、輸送……………

………ストリートフィールド

七、K2の天候……………ハウス

地圖のいゝものがない、之はストリートフィールドが受持つてゐたものらしかつたが戦争へ参加してしまつたので出来なかつた、とハウストンから私の所へ知らせて來た。

外國の本には餘り誤植はないものであるが此の本では最後の方に少し見られる。附録の(一)は參考になつたがまだ調査の不充分の點があると思ふ。(本會報附録參照)

三百三十八頁にある「天候並びに溫度表」は五、六、七、八月に亘る足掛け四ヶ月の經驗が詳細に記録されてゐて非常に參考になる。

寫眞は最近來たアーノルト・ハイムの「神々の玉座」(英譯版)邊りに比べるとまるで見劣りがする。カットの使ひ具合その他の點に於いてシブトンの「ブランク・オン・ザ・マップ」に良く似てゐる所がある。

然しかうした本はカラコラム探検史上の一つの立派な記念塔であるのだから日本語にして置く必要があらうと思ふ。(吉澤一郎記)

ヒマラヤの傳説 藤木九三編 中村勝郎裝幀 壹圓貳拾錢 朝日新聞社發行

關西山岳界の重鎮藤木氏の譯編になる山の傳説集の一つが又出た。新聞の廣告によると少年少女達の好讀物となつてゐたが大人が讀んでも勿論面白い。吾々はラヂオで七時のニ

切 拔 帳

ユースよりも六時二十分から始まる子供達への罪のない新聞の方に興味を惹かれる場合が多い。大人の世界には虚偽が充滿してゐるが子供のそれは天真爛漫であり清澄無垢である。吾々の情操は文切り型の小説によるよりも慇懃した純粹澄明な物語りによつて一層培育せられるものである。

藤木氏の文章には流石何十年間の経験により何處にもソツがない。翻譯の臭味も全然ない。之なら子供が讀んでも自分達の話として受入れる事が出来るだらう。

「チヨモルンマの魔魔」其他六つの物語りが集められてゐるが總て「旅」や「婦人朝日」に一度出たものであるとの事。かうして纏めて出すといふ事は吾々にとつても大いに都合がいゝ。ヒマラヤの文獻に親んでゐる人達にはこうした世界の屋根を背景とした物語りに特別な興味を持たれる、と同時に其の中に流れる何物かを汲み取る必要がある。

チヨモルンマをエグエレストの西藏名として居られる事には多少の異議があるがそんな詮議は茲では必要であらう。(會報七八號參照)

装幀は關西物を手懸けてゐる例の中村勝郎氏。いつも乍ら垢抜けがしてゐて氣持がよい。(吉澤記)

歐洲第二次大戦が九月一日に始まつた昨年のヒマラヤの登山探検踏査遠征は各遠征隊の出発がそれよりずつと以前だつたため相變らず相當の賑ひを見せてゐる。其等に就てはユースの来る度に一々報告はして置いたが最近色々纏つた資料が入つて來たのでこゝに一括して御報告して見ようと思ふ。

【獨逸】

・ベーター・アウフシュナイターを隊長とするナンガ・バルバット隊はディアミライ側を踏査してゐたが詳細は今尙不明である。一部の者は印度河を渡つてラカボシイに向つた様である。

・シニオルチュの第二登頂を行つたグロブ、バイダー、シュマーデラーのミュンヒェン隊は五月三日にラチエン到着、五月八日ゼム氷河上のグリーン湖畔(四八八〇米)にBCを建設。一週間の攻撃の後五月二十九日に約七、三〇〇米突の山に登つたといふが山名未詳。

六月になつてテント・ピーク(又の名をグライブリー七三六三米)の初登頂に成功、尙トウインス峰を狙つたがシュガーローフとトウインスとの鞍部を過ぎてから天候悪化し遂に敗退した。

・尙南米方面ではキンツル教授を隊長とし隊員としてハンス・シュウイツァー、カルル・シュミット、ジークフリート、ローラー、ワルター・プレヒト等が参加してゐる一隊はペルーのコルディレラ山系に於てネグアド・コントラヒエルバス(六〇三六米)、バルカラジュ(六一五〇米)、ランラバルカ(六一六五米)及びツェロ・モラード(五〇六〇米)等に登つた。一行は登山のみならず前回の遠征の繼續事業として廣範圍に亘る地圖の作成を行つてゐる。

・又エクワドルへ向つたゴットフリート・ヒルツ及びウィルフリート・クレーンの二人は活火山で處女峰と謂はれてゐるイリニチャ(五三〇五米)へ登頂した。

【瑞西】

會報前號報告通り。

【波蘭】

・カルピンスキーを隊長とした一隊が七月二日ナンダ・デヴィの東峰(七四三四米)に初登頂した事は他の機會に發表して置いた。(登頂者はブヤークとクラーナル)そして遭難事件に關しても一寸言及したが其後のニュースをこゝに記す。

ナンダ・デヴィの東峰に成功した一行はトリズル(七一二〇米)に向ひ、七月十七日ミラム氷河上に張つた天幕から最後の攻撃に移つた。翌日カルピンスキーとベルナチキウィ

ツの二人は三人のボーダーを伴ひ次のハイ・キャンブを設置、同日人夫だけ下方キャンブに下つた。

七月十九日、一行の他の二人は新しいハイキャンブに登つたがキャンブは跡方もなくなつてゐる。前夜の雪崩ですつかり埋つてしまつてゐたのだ。二人はそれから二日間僚友の足跡を搜索したが全く不明で、僅かに器具類を少し許り發見出來ただけであつた。遂にナンガ・バルバットの二の舞を演じた譯になる。

【米國】

・K2に向つた米國隊は二七四五〇呎まで達し一九三八年隊より一四五〇呎頂上に近づいた(午後六時半)が連絡の不完全と悪天候、其他人的要素の缺陷等(尤も之は資料を讀んでの想像であるが)により隊員ウォルフと優秀なシエルバ三人は遂にC7に於て悲愴な最後を遂げてしまつた様である。いづれ詳報は「山岳」に發表する。

【英國】

・エリック・シブトン、E・フアウンテン博士、スコット・ラッセル、A・スペンダーの四人よりなるカラコラム遠征隊はシャクスガムには行かず、ヒスパー、ピアフォ、パンマ一氷河方面を踏査したらしい。スコット・ラッセルからの手紙の抜粋は次の通りである。

七月上旬ギルギット出發、次の六

週間はヒスパー氷河に於て主として測量並に植物の採集研究に費した。其の間多くの側氷河を踏査しニシエク峠の第二回横斷をなしてアランドに行つた。尙それより六日前に一行中のシブトンとラッセルはヒスパーバスを通過してピアフォ氷河の源頭にあるスノー湖を探索した。其の後シブトンとフアウンテンはパンマ一氷河に於て寫眞測量をなし、又測量官モットとラッセルはコーニス氷河に横斷し其處に二週間を送つた。

登山は一行の主たる目的ではなかつたがスノー湖の附近にあり嘗つてワークマン夫妻が登つた事のある一峰の頂を極めた。

・H・W・ティルマンは今まで餘り知られてゐないアッサム・ヒマラヤに進入したが、マラリヤに罹つたり人夫に故障が出來たりして所期の目的は達せられなかつた。ティルマンが狙つたグループの最高峰はカント(二三二六〇呎)でチヨモラ一から尙東へ續(グレイト・ヒマラヤの主軸上にある。ティルマンの再攀は疑ひない所であらう。

瑞西ヒマラヤ遠征隊歸國

本會報前々號に吉澤氏が紹介した瑞西ヒマラヤ遠征隊員アンドレ・ロッシ以下三名は昨年十一月初旬チュリッヒに歸着したが、手早くその報告を纏め年末に「ヒマラヤの瑞西人 Schweizer im Himalaya」と題し

て出版し、ドウナギリ、ゴリバルバット、ラタパンの初登頂からバドリナートの雪崩遭難に至るまでの記録及び寫眞を公表した。同時に十六ミリ二〇〇〇米の映畫も提供されたと云ふ。

マイエルの死去

プレスラウ大學地質學教授で、我國にも「行爲と夢想」其他の著書を通じて識られてゐるオスカー・エリッヒ・マイエル氏は昨年十一月二十二日登山事故で死去した。

白馬湖池で遭難

二月十八日折柄の吹雪中を白馬連峰湖池から天狗原に向つた鹽川三千勝氏(東京・三十六歳)一行六名は歸途午前十一時半頃、湖池小屋後方の斜面に於て雪崩に襲はれ、鹽川氏はデブリの下に埋没し、翌十九日午前九時頃應援の人夫により發掘されたが、既に遅く不歸の客となつた。因に同氏は「山岳」第十九年三號に寄稿してゐる。

會員通信

奥日光便り 廣瀬 潔

鐵道とバスが不便になつて、却つて奥日光は元の靜寂さを取り戻した。二月十七、八日久しぶりでスキ―に行つたが、温泉宿もガラ／＼だし、グレンデもすいてゐる。全日本

スキー聯盟の高橋次郎、千家哲磨兩氏が、少數の眞摯なスキー家を集めて、標準型スキー術を教へてゐた。

十八日は山王峠ヘッサーに行つたが、このコースを通つた者が、四名だけとは驚いた。刈込切込兩湖を経て、峠を下つてくると、白樺林にまだ木の香も新しい學習院小屋が建つてゐた。落成式當日だつたので、渡邊八郎教授初め山岳部の方々が澤山見えてゐた。内部もすつかり見せて頂いたが、木組のがつちりした、それでどこか瀟灑な感じのする明るい小屋だ。窓からは白樺林を通して男體の山容がゆつたりと眺められる。

ストロブの傍で、茶菓の饗應を受け、親しく渡邊教授のお話をうかがつて、小屋を辭した。

光徳沼の牧場では、ばあさんが牛乳を温めてくれる。二十何年前私がまだ若い學生だつた頃、よく遊びに來たので、未だにその頃の事を覚えてゐる。『二、三日前も寫眞を出して、をなたの話をしてゐたところでした』と懐しさうに云ふ。

奥日光は何度行つても、いゝところだ。

熊の湯にて 伊藤政市

私の友人に熱心な山男が居り、月曜日は勿論休日に彼が山に出掛けな

い事が在れば不思議な位で事實、何處かに出掛けて居つた。その熱心さも勤務先が替つて以來三ヶ年間に續けられて居たのだから相當なものだ

と思はれます。

私が健康を害し元氣が無いのでその友人も山に誘ふ事を断念してつ

た。數年前迄身輕に元氣で山に出掛けて居つた自分の事を思ひ合せ微笑しく思つて居りました。

その友人も昨秋邊り召集を受け勇躍出征したのも遂昨日の様に思れて居りました。

私も漸く身體に自信が持てる様になつたので數日前熊の湯に出掛け様と言ふ當日、その友人大谷昌夫少尉の壯絶な戦死の報を聞き、徒に何もなし得ず、考へ込んで居る私はあれ程思ふ存分山に出掛け上眞實死處を得た本人は定めし満足であらうと、私は友人を羨しく思れてならな

い。

山の雑誌の寄稿家で「山岳」誌の愛讀者であつた友人に、私も早く元氣になつて山の寫眞の優れたものを撮影すると言つて別れた。その友人

大谷少尉と再び會ふ事が出來ないのは悲しい。本日で三日間熊の湯に閉じ込めてゐた。毎日強風で雪も相當降つてゐる。天候にお關なしに元氣一杯入れ替り立替り出發、到着する種々な人々を羨しく思ふのみであつた。寫眞を目的にする私には天候が第一なのだ。本日も駄目だとあきらめて居たのに、天祐に正午頃から快晴になり私は勇んで熊の湯を出發途中充分寫眞を楽しみ一氣に滑降、愉快な氣分で上林ホテルに落付く事が出來ました。(二月二十七日)

中支戦線より 濱野正男

黒田兄、中司氏皆様御元氣の事と存じます。

中支にも中屋氏。松方さんが來てゐると思つてゐましたが未だ會ひません。中支にも春めいたものがうか

どはれ、日中は汗ばむ位です。やがて足早やに春も過ぎ頭をばーとさせ大陸の夏が來るんです。幸小生頗る元氣で軍務に服してゐますから御安心下さい。山岳部の報告も湯淺兄が満期になつたので着々出來上る事と思ひます。

山岳會々諸員兄の御健康を祈ります。草々

北支だより 飛川維之

會報御送附に預り誠に有難うございました。自宅には初めから全部綴込んで保存してありますので、何か貴重な物をいただいた様な氣がします。ヒマラヤの記事や亦前に歩いた事のある「雲取から氷川へ」六ツ石から驚ノ巣へ」等の記事も懐しく隅から隅まで全部讀みました。私も出征以來北滿、北支と各地へ參り北滿では小興安嶺、北支では大行山脈の麓にも居りましたが、北滿の方は廣い平原からなだらかな丘陵をして、段々に盛上つて行くので、山と云つた感じは出ませんでした。それが程言葉には一寸云へない宏大な感じがします。汽車に乗つてこの小興安嶺を横切るのに五時間位かゝります

中支戦線より 濱野正男

黒田兄、中司氏皆様御元氣の事と存じます。

中支にも中屋氏。松方さんが來てゐると思つてゐましたが未だ會ひません。中支にも春めいたものがうか

どはれ、日中は汗ばむ位です。やがて足早やに春も過ぎ頭をばーとさせ大陸の夏が來るんです。幸小生頗る元氣で軍務に服してゐますから御安心下さい。山岳部の報告も湯淺兄が満期になつたので着々出來上る事と思ひます。

山岳會々諸員兄の御健康を祈ります。草々

北支だより 飛川維之

會報御送附に預り誠に有難うございました。自宅には初めから全部綴込んで保存してありますので、何か貴重な物をいただいた様な氣がします。ヒマラヤの記事や亦前に歩いた事のある「雲取から氷川へ」六ツ石から驚ノ巣へ」等の記事も懐しく隅から隅まで全部讀みました。私も出征以來北滿、北支と各地へ參り北滿では小興安嶺、北支では大行山脈の麓にも居りましたが、北滿の方は廣い平原からなだらかな丘陵をして、段々に盛上つて行くので、山と云つた感じは出ませんでした。それが程言葉には一寸云へない宏大な感じがします。汽車に乗つてこの小興安嶺を横切るのに五時間位かゝります

知らず／＼の内に段々上つて又下つてしまひます。窓から見ても山らしい姿は見出す事は出來ない程で、山と云ふより廣い／＼丘陵とでも云ひたい様な氣がします。そこは一面草原で六月には雪も解けて、百花一時に咲亂れて見事な御花畑となるのですが、私はそれも見ずに北支へ轉戦しました。北支では勤務上宏大な盆地から雪に輝く大行山脈の全望を時々眺める事が出來ました。山の姿も内地の山とよく似て居ますが、近づくといひ方は段丘をなして、木も草も無く赤肌の山ですが、所には岩場もあつて登山には相當面白いかも知れません。然し今尙此の山肌には殘敵も居て登る事は思ひも寄りませんが、山が見えるだけでも嬉しい氣がします。そして北滿には北滿らしい山の味があり、又北支には北支特有の山の味があります。今更の様に内地の山は懐しくてたまりません。こちらでは谷のせゝらぎも聞えなれば、晝荷暗い樹林もありません。鳥の聲も誠に大難破な味の無い大陸的な聲を出します。内地の事が色々と思ひ出されて來ます。古い事を申上げて済みませんが、大正九年頃と思ひましたが、私は毎晩の様に東京YMCAのプールに泳ぎに行きました。オリンピックで有名な高石氏や、今の水上聯盟の松澤一鶴氏も毎晩來られて、熱心に泳いで居ました。其時の先生が梅澤親光先生でクロールが漸く流行し初めた頃で、私も盛んに

教へていただいて居りましたが、先生は神傳流の技手の名手でクロールで泳ぐ事は殆どありません、其時分Yでもハイキングクラブと云ふ會があつて、私も會員になつて時々山にも出掛けましたが、あの丸々と太つた梅澤先生が日本山岳會の發起人だとは少しも知りませんでした、今は故人となられ、其頃に山の方も教へていただきましたと残念で仕方がありません、後年原全教氏に御會してから、原氏も學校で梅澤先生に教へていただいた事があつたさうですが其時は教授の方は半分で山の話ばかりされ面白かつたとの事でした。

やはり其年の夏友人と今のアルプス銀座通りを歩きました、燕への登りです、朝から中房温泉のプールで盛んに泳いで、十時頃から重いリツクを背負つて登り初めましたので足が重くはかどりません、一休しては又登つて居ると、下から「オーイ」と聲を掛ける人があります、待つて居ると年の頃四十過ぎの方が白い着物に菅笠、脚絆、草鞋で、カバンと水筒を下げて、如何にも山になれた足どりで登つて來ます、私達の側へ來られて一休しながら、自分は今朝有明温泉から登つて來たが、以前にも此處を通つたが道がとても好くなくつたと感心して居られる様でした、そして私は若い時から山が好きで方へ行つたが、北アルプスが一番好き、君達は毎年夏には是非亦お出掛けなさい、何時もこんな姿で出掛け

るので近所の手前、日が暮れてから家を出て、夜になつて家に歸る様に居るとも話されました、足の遅い私達は遠慮して後から参りました、燕小屋に着いた時は、先生は頂上を一週して來られた後でした、何時も先生は朝早く出られましたが、まだ山を知らない私達は前日の疲れでつい朝寝坊して後から出掛けて居ましたが、其後槍の肩の小屋でも上高地の五千尺旅舎でも一所になりました、五千尺では部屋も丁度隣りだったので色々山の話も伺ひました其時に初めて名刺をいただきましたが、それには金澤高等學校旅行部長林並木と書いてあつた様に記憶します、翌日は徳本峠を越して松本の宿屋に一泊して翌朝汽車に乗りますと又林先生と御一所になりました、車中でも繰返し北アルプスを褒められて又來年も是非來る様に言つて居られました、先生は姥捨驛邊りでお別れして下車された様に記憶して居ります。

先年山岳會の會員名簿で林先生も山岳會發會當時からの會員であられた事を知りました。私は度々大先輩にお目に掛りながら少しも知らないで居た事を今になつて残念に思つて居ります。今は共に山を語る友も無く會報を送つていただいた嬉しさから思はず駄文を長々と書いてしまいました。會員各位の御多幸を祈り上げます。

祖母山行記 石田嘉郎

「あの山に祖母が居ます」と 神武天皇御東征のみぎり仰せられて以來添山峯の名が祖母となつたと云ひ傳へる大分宮崎縣界の同山（一七五六米）に一月二日午後三時四十五分登頂した、北田正三氏の案内記を參考とし、三田井高森の五萬圖と、握り飯二つ、角砂糖五個、磁石、水筒とビッケルと云ふ輕装で、以下簡単に時間記録を述べる。

豊肥線高森發午前九時二十分津留行バスにて發、津留着十一時（以後徒歩）五ヶ所正午嶽部落十二時二十分、嶽部落の上部に小さき鳥居がある所より風穴の指道標通り左に急坂を二十分位登ればカヤトの長い見晴しのよき尾根傳ひ行進曲など口づきみつゝ進む（二時二十分）、頂上は雪尾根は小春日和、上はとても寒く、汗も出ない。

下山は同じ道を尾平岐路（三時五十七分）へ引き返し、非常に險峻なその坂を下り午後六時半尾平嶺山の紅葉屋と云ふ、唯一の旅館に宿泊、交番所まで三里あると聞いたが山の宿としては上々で相當の員數も收容出来る大きな家である。

三日午前七時十五分紅葉屋發、尾平峠九時、非常に急な坂である、十時三十五分中野内着、この方面には指導標なく岐路が多いが道は樂であつた。

才田一時、天の安河原二時二十分

着天の岩戸神社、及釣橋を渡り本宮參拜、四時岩戸發（バス）四時半三田井着、高千穂神社參拜一泊。
四日七時三十五分三田井發（バス）八時半河内、九時二十分柳谷、十時高森、十二時熊本着、歸途に上つたが、祖母山には猪狩用掘銃のある事があるそうだから、私の如く單獨登行の場所に限らず夜道や道以外の所は注意すべきだと思ふ。

北海道の旅 富田健一

山岳會の諸氏御元氣の事と存じます。三月の北海道に憧れ十日の朝大阪發の急行で大雪山へ向ひました。

十二日から降り出した雪は十八日迄つゞき愛山溪温泉で雜詰料理に閉口たれましたが待つた甲斐あり十九日やつと旭岳へ登頂。トラムウシ、忠別、十勝などの大觀を得ました。歸りの滑降は流石大雪山。粉雪の細々した煙を引き乍ら愉快なS字型長距離滑降が出来、渡道の甲斐ありと感銘しました。その日、十一日から十勝縱走を志して吹雪のため忠別岳を越した處で九日間の雪穴生活をして温泉へ引渡す途中の一人の優秀な山男と一緒にになりました。

私は登別、定山溪に廻りムイネ、ニセコ、へ登る豫定です。札幌では會員佐々岳兄に電話でお話し乍ら會へず失禮しました。



會務報告

二月定例理事會並に
役員總會

二月十三日（火）午後六時三〇分

出席者 鳥山、野口、吉澤、茨木

模、塚本、黒田、冠

一、社團法人の件

目下書類作成中、三月上旬までに完成の上厚生省に提出の筈

一、山岳第三十五年一號編輯報告

原稿相當に集まりしも一方に偏する傾きあるため今少しく様子を見たる上にて四月頃印刷所へ廻す豫定

積雪期に於ける臺灣次高

山集 神戸商大山岳部

タロコ族の經濟生活

右同 阿都武道

北葛澤廻行記録 西岡一雄

内蒙古調査旅行（上）

宮崎武夫

興安嶺横斷記 京大山岳部

河野齡藏氏追悼記 小島鳥水

赤羽良一氏 茨木猪之吉

過去五年間の登山記録

(新聞切抜による) 塚本繁松

一、會報編輯報告

一、山日記の件

六月發行は現下の狀態にては絶対に不可能につき年末出来れば發行の豫定、九月に原稿を渡す事にして目下岩波にて豫算組立中

一、登山團體懇談會の件

一、二月小集會の件

一、新入會員證考の件

左の四氏入會承認す。

前田利典、矢島利雄、藤野關夫、

古田彰

第九十回小集會の記

二月十五日、商工俱樂部で開催。

昭和十五年の劈頭、新聞紙上に大きく報導された北大山岳部員の日高山脈に於ける遭難事件に就て、本會々員であり北大山岳部先輩である初見一雄氏から詳細なる報告をきいたのである。

遭難された八名の部員の多くは初見氏の山仲間であり、嘗ては苦樂を共にした人々であるだけに、冒頭に於て、初見氏はこの遭難事件に就いて語るに當り悲しみを新らたにする

と強調された。

講演は先づ日高山脈に於ける今日までの登山記録の概観、ベテガリ岳の積雪期試登の經過、今次遭難した

登山隊一行の經歷、登山行程、遭難前後の天候、雪崩の襲來に至るまでを詳細に説かれた。

遭難の報至つて後、搜索隊の編成急行、山岳部員の涙ぐましい努力によつて亡友の骸が短時間の間に一人を残して發掘された經過を語られ最後に雪崩發生の因と想像される點を説き、遭難された人々の行動、判斷等に就いては山友としてまた先輩として同情ある批判を下された。

岳友を失つた悲しみを忍んで、事件の詳細を述べられた初見氏に謝すると共に、吾等は同じく山岳に心をひかるゝ者として、若き有爲の青年を失つたことを悲しみ、八人の靈に哀悼の念を捧げることである。

次に之も一月上旬東亞の朝日岳に於ける日本登高會々員溝口氏一行の遭難に就て報告を何ふ管であつたが最近までその消息が判明せぬため、まだ報告の時期に非ずと辭退されたので次の機會に讀つて集會を閉じた。

(T・F)

退會者

(一三三七)	大阪市	鍋倉 英夫
(一五七八)	札幌市	西村 正
(六 七)	東京市	柳田 國男
(一五〇七)	東京市	鈴木伊三郎
(八二二九)	大阪市	山脇友三郎
(一六七五)	兵庫縣	岩田 正俊
(一五三〇)	東京市	菊地 武彦
(一二五二)	東京市	木村久太郎
(三六五)	青森縣	小笠原松次郎
(一四四九)	東京市	丹羽 惠
(八九四)	兵庫縣	坂上 亮三
(六五九)	大阪府	別所 史郎

會員章再交附

一八〇二番 大阪市 宮崎 武夫
一八〇三番 廣島市 深川 利夫

代表者變更

東京芝浦電氣株式會社マツダ支社
山岳部 代表者 井上 一男
京都帝大學友會旅行部 木原 均

改姓

大國滿次郎 (舊姓) 國澤滿次郎

昭和十五年四月廿五日印刷
昭和十五年四月三十日發行

東京市豊島區池袋四ノ四五八
發行所 石 原 巖

東京市芝區平町一(不二屋ビル)
發行所 日本山岳會

電話芝(四三)一六四九
振替東京四八二九

東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷所 植田 庄助

印刷所 成文堂印刷所

本年諸作成に参考とせし資料次の如し（歐文のみ記載）

- (1) "Die Alpen" Nov. Vol. IX, No. 11, 1933
—"Die Erschliessung des Himalaya" (Schluss)—
- (2) "Die Alpen" Okt. Vol. IX, No. 10, 1933
—"Liste chronologique des expéditions dans l'Himalaya"—
- (3) "Die Alpen" Juni Vol. XII, No. 6, 1936
—"上記と同じ"—
- (4) Th. Herzog, "Der Kampf um die Weltberge" München 1934
- (5) Fritz Schmitt, "Der Bergsteiger von heute" München 1937
- (6) Robert H. Bates (Editor) "Five Miles' High" New York 1939
- (7) Walter Schmidtkunz "Alpines Handbuch" Band I, Leipzig 1931
- (8) A. J., G. J., H. J.

文献欄にて使用せし略字

- (1) A. J. Alpine Journal
- (2) G. J. Geographical Journal
- (3) H. J. Himalayan Journal
- (4) Zft. Zeitschrift des Deutschen und Österreichischen Alpenvereins

Alpenvereins

調査不充分の點多々ありと思へども主要なるものは總て記載せる心算なり。大方諸賢の御教示を得て將來完璧のものたらしめんとす。尙印度測量局より派遣さるゝ定期的踏査測量隊については詳細不明につき略せり。表中(1)及び(4)は参考として挿入す。

吉澤一郎

東部カラコラム概念圖



本圖は印度測量局百萬分一圖幅“印度及其の附近”52號レー圖(1916)51號ヤルカンド圖(1923)及びK. メイスン少佐の“シャクスガム並にヤルカンド河上流地域圖”1:235,440(1928)を基礎として作製せるものに後、山脈とメイスン提案になる其の名稱と峠名及氷河名を附加せるものであつて第一面所載の範圍並びに命名法(英國王立地學協會による最後のもの)決定以前のものである。等高線は二萬呎、黒點は二萬五千呎以上の所を示す。圖中アギール・カラコラムの西北端にある河はゾーグ・シャクスガム河なれど1937年E. シプトン等の踏査により北流しヤルカンド河の方へ合流するものなる事判明せり。(第一面の圖参照)

尙第一面所載の「範圍」並びに「分類表」については目下原稿整理中の「カラコラムの問題—主として其の命名法の變遷について」に於いて述べてある。いづれ發表の機會があらうと思ふ。

番 號	年 代	隊 長 名	地 域	文 献
21	1912	"	Siachen 氷河の精査。 Tawiz Peak (21,000呎), Junction Peak (20,840呎)等に登る Kondus 氷河踏査。	A. J. XXXII, G. J. 1914. 上記著書。
22	1913	Kenneth Mason	Karakoram と Hindu Kush 兩山脈接合點附近踏査測量。	
23	1913-14	F. de Filippi	Rimo 氷河及び Shyok, Yarkand 河源流地踏査。	A. J. XXXVII. "The Italian Expedition to the Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan, 1913- 14" London, 1932.
24	1922	C. Visser	Saser Muztagh 踏査。	A. J. XXXV. "Durch Asiens Hochgebirge (Himalaya, Karakoram, Aghil und K'un-lun)", Frauenfeld-Leipzig, 1935.
25	1925	"	Hunza 溪谷, Batura 氷河。	G. J. 1926. 上記著書
26	1926	Kenneth Mason	Shaksgam 溪谷, Aghil Depsang 踏査。	G. J. 1927, A. J. Nov. 1927 "Exploration of the Shaksgam Valley and Aghil Range, 1926. Records of the Survey of India Vol. XXII, Dehra Dun, 1928.
27	1927	H. F. Montagnier C. John Morris	Ghujerab 氷河。	G. J. LXXI. (1928)
28	1928-29	Duke of Spoleto	Baltoro 氷河, Shaksgam 溪谷の 踏査。 Cheri Chor (17,881呎)に登る。	G. J. 1930. Aimone di Savoia-Aosta, Duca di Spoleto and Prof. A. Desio: "La Spedizione geografica italiana al Karakoram", Milano-Roma, 1936.
29	1929-30	C. Visser	Siachen 氷河, Saser Muztagh の 踏査。 Yarkand にて越冬, Shayok を探 る。	H. J. III (1931). G. J. Oct. (1934) 討論注意。 Die Alpen, 1930, 1931. "Zwischen Kara-Korum und Hindukush", Leipzig, 1928. (23) の著書参照。
30	1930	G. Dainelli	Siachen, Teram-sheer 氷河踏査, Col Italia (約 20,000 呎)を踰へ Rimo 氷河を渡る。	H. J. IV (1932), G. J. 1932. "Buddhists and Glaciers of Western Karakoram", London, 1933.
31	1933	Gregory 及び Auden	Biafo 氷河の地形調査。	H. J. VI (1934).
32	1934	Dyrenfurth	Baltoro Kangri [Golden Throne] (23,990 呎) 及び Queen Mary Peak (24,350 呎)に登る。 Gasherbrum I [Hidden Peak] に試登。	H. J. VIII (1936). Die Alpen, 1935. Der Bergsteiger, 1935.
33	1934	R. C. F. Schomberg	Shimshal 峠, Shaksgam 溪谷 (春及夏), Hunza 地方。	"Unknown Karakoram", London, 1936. A. J. Vol. XLVIII, May, 1936. " " Nov., 1936.
34	1935	C. Visser	Shaksgam 溪谷 Shyok 河上流 の踏査。	
35	"	J. Waller	K [Peak] 36 (25,400呎) 試登, 24,500 呎に達す。	A. J. XLVII (1935), H. J. VII (1936), H. J. IX (1937).
36	1936	H. de Ségogne	Gasherbrum I [Hidden Peak] (26,470 呎) 試登, 22,960 呎に達す。	H. J. IX (1937), La Montagne 1936, 37, Alpinism 1936, "Himalayan Assault, by the French Himalayan Expedition 1936." [英譯者] Nea Morin, London, 1938.
37	1937	E. Shipton	Shaksgam 溪谷の踏査。	A. J. L, G. J. Vol. XCI, April, 1938. "Blank on the Map", London, 1938.
38	1938	Campbell Secord Michal Vyvyan	Rakaposhi (25,550 呎) に試登。 22,500 呎まで達す。 Kunyang 氷河の踏査。	H. J. Vol. XI, 1939. A. J. LI Nov., 1939.
39	1938	J. Waller G. Brown	Masherbrum (25,660 呎) 試登 25,000 呎に達す。	H. J. XI, (1939). A. J. Nov. (1938), G. J. Feb. (1940)
40	"	C. S. Houston	K ² (28,250 呎) にて 26,000 呎 に達す。	A. J. Vol. LI, May, 1939, H. J. Vol. XI, 1939, R. H. Bates "Five Miles' High", New York, 1939.
41	1939	E. Shipton	Hispar 氷河, Biafo 氷河, Panmah 氷河	A. J. Nov., 1939 (通信)
42	"	F. H. Wiessner	K ² にて 27,450 呎に達す。	Appalachia, Vol. V, No. 12, Dec., 1939, Le Alpi, 1939-40-XVIII.

番 号	年 代	隊 長 名	地 域	文 献
1	1850年以前	(1533) 支那トルキスタンの王 Mirza Haidar, Karakoram 峠及び Saser 峠を踏ゆ。此のルートは後交易路となりたるものなり。Haidar の峠踏えは文献にあるものとしては最初の記録である。(1760) Espinaha—エヌイタ派の教徒—Muztagh 峠を踏ゆ(發音は“ムツターゲ”である)。(1820 頃) Moorcroft (地域詳細不明, G. J. Sept. 1929) (1848) Th. Thomson 博士 Karakoram 峠を踏ゆ(最初の歐洲人)。		
2	1854	Alec. Cunningham 少佐	Gilgit 河の上流, Shyok 河の源流地及び西部西藏。	上記 G. J. 及び Clements Markham, “History of the Indian Surveys.” (1871, 1878)
3	1856-7	A. Schlagintweit	E. Muztagh Pass (約 18,045 呎)	H. J. VI. (1934) G. J. 75 (1930) B. H. Schlagintweit: “Results of a Scientific Mission to India and High Asia undertaken between the Years 1854 and 1858.” London, 1861-63.
4	1858	T. G. Montgomerie	Kashmir の Wular 湖附近なる Haramukh の観測所より K2 を発見す。	G. J. April, 1927
5	1861	H. H. Godwin Austen T. G. Montgomerie 大尉	Biafo, Baltoro, Panmah, Chogo 各氷河及び K2 附近。	A. L. Mumm: “The Alpine Club Register, (1857-1863),” London 1923. (記録のみ)
6	1870	J. W. Hayward	?	(2) と同じ(但し著書の方は日本では入手困難と思はる)
7	1887	F. Younghusband	中央亞細亞横斷後 Muztagh 峠(17,789 呎)を踏す。	A. J. XIV (1889), G. J. (1930) “The Heart of a Continent,” London, 1896.
8	1888	Grombchevsky 大佐	Hunza 及び Shimshal 方面。	Schomberg “Unknown Karakoram” London 1936. H. J. Vol. XI, 1939.
9	1889	F. Younghusband	Shaksgam 河の源流踏査。 Saltoro 峠, Indira Col (20,866 呎) の発見	(7) の著書参照。
10	1892	Martin Conway	Hispar, Biafo, Baltoro の諸氷河を踏査。Nushik La を踏ゆ。 Pioneer Peak (22,600 呎) に登る。	A. J. XVI, Zft. 1895 C. G. Bruce: “Twenty Years in the Himalaya”, London, 1910. W. M. Conway: “Climbing and Exploration in the Karakoram-Himalaya”, London, 1894. O. Eckstein: “The Karakoram and Kashmir”, London, 1893.
11	1892	George Cockerill	Hunza 及び Nagar 地方	H. J. Vol. XI, 1939.
12	1899	Bullock-Workman	Biafo 氷河, Skoro La 附近の踏査。Koser Gunge (21,000 呎) に登る。	A. J. XIX, XX. “In the Ice World of Himalaya”, London, 1900.
13	1902	“	Chogo Lungma 氷河を踏る。	A. J. XXII “Ice-Bound Heights of the Mustagh”, London, 1908.
14	“	O. Eckenstein	K ² を試み, 北東山稜を 21,400 呎に達す。	Zft. 35 (1904) J. J. Guillard: “Six mois dans l'Himalaya, le Karakorum et l'Hindukush”, Neuchâtel, 1909.
15	1903	Bullock Workman	Chogo Lungma 氷河の踏査。 Mt. Chogo (21,506 呎), Mt. Lungma (22,573 呎) に登る。 Pyramid Peak (24,492 呎) に試登, 23,390 呎に達す。	A. J. XXII (13) の著書参照。
16	“	Ferber 及び Honigman	Old Muztagh 峠	G. J. 1907, Zft. 36 (1905).
17	1908	Bullock Workman	Hispar 氷河踏査。	“The Call of the Snowy Hispar”, London, 1910.
18	1909	Duke of Abruzzi	K ² を試み Savoia Pass にて 21,870 呎に達す。 Skyang Kangri [Staircase Peak] (24,750 呎) を試み 21,650 呎に達す。 Chogolisa I [Bride Peak] (25,110 呎) を試み 24,600 呎に達す。	A. J. XXV F. de Filippi: “Karakoram and Western Himalaya”, London, 1912.
19	“	T. G. Longstaff	Saltoro Pass, Kgyong La, Chulung La 等を探り、 Siachen 氷河を発見す。	A. J. XXXIV, XXXV (1911). G. J. 1910, P. 644, G. J. Oct. (1934) Workman: “Two Summers in the Ice-Wilds of Eastern Karakoram”, London, 1917.
20	1911	Bullock Workman	Bilafond La, Shergigang, 氷河, Siachen 氷河を踏る。	A. J. XXXII 上記著書参照。

カラコラム遠征【探検・踏査・登山】年譜

(Expeditions to the Karakoram)



Great Karakoram	Batura Muztagh	{ Koz Group, Yashkuk, Gr., Kampire Dior Gr., Pasu Gr.,	Kuk Gr., Atabad Gr.
	Hispar "	{ Momhil Gr., Kanjut Gr.,	Yazghil Gr., Virjerab Gr.
	Panmah "	{ Nobande Sobande Gr., Choktoi Gr.,	Drenmang Gr., Chiring Gr.,
	Baltoro "	{ Paiju Gr., K ² Gr.,	Trango Gr., Broad Gr., Lobsang Gr., Gasherbrum Gr.
	Siachen "	{ Sia Gr., Teram Kangri Gr.,	Staghar Gr., Singhi Gr., Kyagar Gr., Teram Shehr Gr.
	Rimo "	{ Rimo Gr., Shelkar Gr.,	North Terong Gr., South Terong Gr., Kumdan Gr.,
	Saser "	{ Saser Gr., Arganglas Gr.,	Chhushku Gr., Shukpa Kunchang Gr., Kunzang Gr., Shyok Gr.
Lesser Karakoram	North of the G. Karakoram	{ Lupghar Gr., Ghujerab Mountains	{ Chapchingal Gr., Karun Kuh Gr.,
	Rakaposhi Range	{ Rakaposhi Gr., Chogo Lungma Gr., Ganchen Gr.,	Bagrot Gr., Hispar Wall, Meru Gr., Phuparash Gr.,
	Haramosh "		
	Masherbrum "	{ Koser Gunge Gr., Chogolisa Gr., Group east of Thalle Valley,	Mango Gusor Gr., Masherbrum Gr., Group east of Hushe Valley.
	Saltoro "	{ Kondus Gr., Dansam Gr.,	Saltoro Gr., Chumik Gr., Chulung Gr. (N. & S.)